

我、破壊の大王なり

白夜の星霊白夜叉

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

テンプレートとの転生をした彼女は、なんやかんや生きていくお話。

正直アルテラをハイスクールD×Dの世界に入れて無双させたかった。

駄文ですが楽しんで読んでください。

目次

プロローグ	私の名は………	1
第1話	墮天使コカビエルの不幸	12
第2話	墮天使アザゼル襲来	32
第3話	三大勢力会談	41
第4話	三大勢力会談 II	52
第5話	哀れな悪魔 カテレア・レヴィ アタン	62
第6話	魔神降臨 無垢なる絶望	79
第7話	神の鞭 原初の星の涙	100
第8話	オカルト研究部	119
第9話	温泉とほいい文明だ	142
第10話	白猫は願いを抱く	164
第11話	出オチって、よくあるよね？	179
第12話	北欧の主神襲来	200

プロローグ 私の名は……

私は死んだ、その筈だ。

しかしなんの因果か私は転生した。

良くあるテンプレ神様転生という奴だ、特典をもらい記憶を持ったまま新たな生を受けた。

さて、簡単に私の説明もした事だし、とある話でもしよう。

君は運命を信じるだろうか？

人間誰しも自分で道を選んで自分の人生を進んでいる。

まあ、中には誰かに言われるままに歩んでいるものもいるだろうが、それもまた一つの選択だ。

しかしふとこう思う事はないだろうか？

あの時ああしてればよかったと、誰もが一度は思った事があると私は思う。

なぜ急にこんな話をしたかと言うと私も昔の自分の選択に後悔の念を抱いているか

らだ。

私にとって運命の分岐点とはやはりこの世界に転生した時だろう。

目が覚めたら森の中、あてもなく旅をしていれば変なゴスロリ幼女に会うは、巨大な喋るトカゲが喧嘩売られるは、へんな組織に勧誘されるはで散々だった。

と、これでは愚痴だな。

さて、話は変わるが現在、私はと言うと。

そこは部屋だった、本棚があり、机があり、クローゼットがあり、ベットがある普通の部屋。

「……………ふふふ」

そんな部屋で、私は一人本を見ながら微笑みを浮かべる。

ペラ、ペラ、ペラ、ペラ。

「……………（ペシペシペシペシ）」

私は読書が好きだ、特にライトノベルの様な気軽に読める小説が好きだ。

会話文があり、挿絵があり、話の内容が分かりやすい、何よりも物語の内容が面白い。

「……………へえ、ここにでお前が……………」

「……………（ベシベシベシベシ）」

特に好きなジャンルとして学園バトル系、または異世界転生系や勘違い系のジャンルの作品が好きだ。

ライバルとの熱いバトルや、ラスボスが仲間になったりなど御都合主義と呼ばれる展開は王道で見ていて楽しい。

そして何よりも、そんな物語を作る作者が大好きだ。

読者が読んでいる間、物語の中のもの達は確かに生きている、たとえそれが妄想の中であろうとも。

故に私は小説が好きなのだ。

「……………ふう、面白かった」

「……………（ペシペシペシ）」

私は本を閉じ、近くの机に置く。

今回のストーリーもとても面白かった、次巻を読みたいところだが、あいにくこれは昨日出たばかりの最新刊なので続きを知るのは作者だけだ。

発売期間から考えるに次が出るのは三ヶ月後だとは思うが……まあいい。

その間に別の本でも探してみるか。

もしくは所持しているシリーズ本を一から読み直してみるのもいいかもしれない。

それはともかく。

「先程からなんだ、オーフィス」

そう言いながら私は目線を横に向けながらそう言った。

「……………我、暇……………」

「いや、私に言われてもなあ」

目線の先にいたのは、黒いゴスロリを着た小さな少女だった。

とても可愛い美少女なのだが、その暗黒の様に光がない瞳のせいでその姿は不気味に見える。

まあ、だからと言ってけして壊れているわけでもなければ病んでるわけでもない、この瞳はオーフィスの標準装備故、致し方がない。

まあ、彼女が普通なのかと問われれば、私は全力で否と答え流だろうが。

こんな見た目だが、彼女は世界最強の龍神なのだから、まあこの話はまた今度。

「暇なら、他のもの達の所に行けばいいだろう」

「いや、我は『ロー』とがいい」

左右に首を振り確かな否定の威を告げる。

いやほんと、どうしてこうなったのか……………いや、確か初めてあつた時からこんな感じだった気がするな。

全く、変に懐かれたものだな。

まあいい、頼られて嫌な気はしないからな。

私は苦笑を浮かべながら、オーフィスを膝に乗せて背中から包む様に抱く。

オーフィスも私に体を預け気持ちよさそうに体を揺らす。

それから暫く静寂の時間が続いていく、そんな時だった。

静寂の中に、突然私の部屋の扉が開いた。

そして入って着たのは中華服姿の男性だった。

鍵は閉めていたはず、と思つたがオーフィスが入っていた時点で考えるのをやめた。

「失礼するぞ、『ロー』」

「はあ、せめてノックはしろと何度言えば解る。なあ、曹操」

私は頭に手を当て呆れながら中華服姿の青年、もとい曹操を見る。

「ふむ、善処しよう」

あ、これまたやるパターンだな。

私は少し物足りなく感じながらも、オーフィスに降りる様に促す。

オーフィスは少し不満そうだがそのまま私から降りて、何故か私の背中にくっついた。

いや、降りろよ。

「ハハッ、相変わらず仲がいいなお前達は」

「笑い事じゃ無いんだがなあ」

そんな私達を見て曹操は笑い声を上げ、私は困りながら溜息を吐く。

そのままでは話がいっまでも進まなそうなので私は自分から要件を問うた。

「はあ、それで要件はなんだ？」

「なに、少し面白い話をな」

「お前が持つてくる面白い話の大半が面倒ごとなんだがな」

「ん？ そうだったか？」

曹操は惚けながら微笑みを浮かべてそう返す。

白々しい笑顔を浮かべて。

私は少し不機嫌になりながら早く話をする様に促した。

「ああ、なに、とある墮天使が戦争を起こそうとしていると言う話だ」

「それはまた、穏やかじゃないな」

「このご時世に戦争とか、その墮天使は一体なにを考えているのやら。」

「全くだ、その件の墮天使の名はコカビエル、聖書にも載っている神話の墮天使だ」
へえ、コカビエルか。

まあ、戦争を考える墮天使なんて奴ぐらいしかいないだろうしな。

なんせ奴は戦闘狂、戦いの中に喜びを感じる精神異常者だ。

むしろ今まで良く持った方だと思う。

墮天使の総督は余程の手腕を持っていると見える。

「奴は教会からエクスカリバーを奪い逃走。恐らく聖剣を持って悪魔や天使との火種を作り、かつての戦争をまた起こそうとしているのだろう」

「それはまた、はた迷惑な奴だな」

「同感だ、正直な所、三大勢力が戦争をしようとするだけでもいい。しかし何よりも気に入らないのが奴らがことを起こそうとしている場所が人間界だと言うことだ」

曹操は右手を握り、そして手から血が垂れる。

その様子からひどく悲しんでいるのがうかがえる。

そんな曹操を見た私は思う。

「…………お前も変わったな、曹操。昔のお前に今のお前を見せてやりたいよ」

今でも思い出す、曹操との出会いを。

世界を旅していた私の前に突如現れた曹操はいきなり『人間の限界に挑んで見ないか？』と私を誘い、世界に喧嘩を売ろうとした危険人物だった。

しかし今では人間を守ろうと奮起している。

最近では種族問わずに孤児の子供や、迫害された、暴走した、神器使い達を集めて面倒を見ている。

ホント、人間なにかあつて変わるかわからないものだ。

「……ああ、そうだな、昔の私なら人間がどれだけ被害に会おうと自分の目的に支障が無ければ見向きもしなかつただろう。まあ、それもこれもひとえにお前のあの言葉がのお陰さ。覚えていいるか？ お前が私に言つたあの言葉を？」

言葉とな？

はて、私は一体なにを言つたか？……ああ、思い出した、確か。

『英雄とはその武勲を認められ讃えられたものの呼称だ。故に質問だ、お前は何か成し遂げたのか？その名の者は確かに英雄だろう、己が信念を貫き通し突き進んだ霸王だろう。しかしそれはお前じゃない、お前は名前が同じなだけの別人だ、例えばその英雄の魂を継いでいようと、記憶を持っていようと、今ここにいるお前は英雄ではない。故に自覚しろ、前はただの愚者だと』だつたか？」

「ああ、そうだ。あの言葉で俺は目が覚めた。自分の先祖の名を語り勝手に勘違いをして英雄を名乗っていた自分から、一人の人として、ただの曹操としての俺に。だから改めて、ありがとう『ーー』」

いや、そんな感謝されても。

私はただ思った事を言っただけなんだからな。

まあ、感謝されて悪い気もしないし、その言葉はちゃんと受け取っておこう。

「さて、少し脱線したな。それじゃ話の続きだ。仮にも私たちは『救いなき弱者に救済を』を信条にしている。故に今回のこれは見逃せない」

「そうか、それで結局どうしたいんだ、お前は？」

私は苦笑を上げながら曹操に問うた。

そんな私の顔を見た曹操も苦笑を浮かべ返事を返す。

「ふふ、お前には敵わないな。単刀直入に言う、この墮天使だが。倒してきてくれないか？」

「いいのか？ 戦争になるかもしれないぞ？」

「ハハッ、その時はその時だよ」

曹操は笑顔でそう言った。

本当に変わったよお前は、もちろんいい意味で。

「分かった、微力ながら頑張ろう」

「微力なんてとんでもない。任せたぞ」

「ああ、任された」

さて、そういう事ならずぐ準備をしないと。

その前に。

私は背中のオフィスを降ろし向き合う。

「すまん、オフィス。この続きはまた今度だ。少しの間だけ待っていてくれ。すぐ帰る」

「ん、我待つ」

「ああ、待っていてくれ」

さてと、それじゃあ準備をするか。

しかし久々の人間界か、私も人間だからな、懐かしき故郷に帰るのも中々如何して楽しみだ。

「では、行ってくる」

「ああ、頼んだぞ……『アッティラ』」

「その名で呼ぶな曹操。私の名前はそんなものじゃない」

そう私の名前はそんな名前じゃない。

この体は私の大好きなかの英雄、そう私は……………

「アルテラだ」

第1話 墮天使コカビエルの不幸

夜の帳が下りる町、そこに私はいた。

ここは駒王町、グレモリー家が悪魔が統治している領地で、今はリアス・グレモリーという悪魔が収めている町である。

まあ領地といったが別に誰かに許可を得ているわけではなく勝手に領地になっているだけだ。

だがまあ、正直その統治している悪魔が誰であろうと私にはどうでもいい。

私にとつて重要なのはここが人間界であり、無関係の人間が巻き込まれる可能性があると言ふことだけだった。

「さて、まずどうするか」

大元の原因の墮天使を探るか、この領地の悪魔を訪ねるか、はたまたこの町に来ているであろう教会勢力を訪ねるか。

生憎私は探知系のスキルなど持ち合わせていない、できて魔力が何処にあるか分かる程度だ。

まあいいか、適当に魔力でも探るか。

私は適当に夜の街を歩く。

因みに今の私の姿は………説明めんどい。

(となりのアルテラさん衣装)

さて、今更だが私の特典について説明しよう。

私の特典は言わずもがなFateのアルテラの力だ。

アルテラのステータスとスキル、宝具などが主な特典だった。

Fateの中でも好きなキャラでなおかつ上位に位置する戦闘能力。

しかしだ、なにを血迷ったのか神様はこのアルテラの特典を少し改造した。

いや、魔改造した。

その結果出来上がったのがこのアルテラさんである。

本来の私が特典に選んだアルテラは英霊のアルテラであった、しかし神はなにを間

違ったのかFate/EXTELLAのアルテラになっていた。

なぜそんなことがわかったか？

そんなもの簡単だ、アルテラのスキルだ。

Fate/grand orderのアルテラのスキルに【星の紋章】というものがある、これはgrand orderのアルテラ曰く一文字足りないらしいと説明がある。

そして私のスキルは「遊星の紋章」という。

そう、「遊星の紋章」とは捕食遊星の使徒の証であり、星を破壊する侵略者の印でもある。

つまりこのアルテラはEXTELLAのアルテラであることがわかる。

まあその程度ならまだ良かった、いや、私がここにいるなら遊星も存在していると同意なのでヤバイが。

しかしだ、このアルテラは私が思っている以上に化け物だった。

何故ならこのアルテラは遊星そのものを自分の力で破壊していたのだ。

この世界のアルテラの記憶にその光景があった。

思わず何やってんの貴方と思ったの私は悪く無いと思う。

なので遊星については心配はない、しかしだ、遊星を破壊した事が原因なのかアルテラのスータスが総合的に上がった、そして宝具も何個か追加もされていた。

遊星を破壊したアルテラは本来の降りるはずだったこの星に降りた、しかし何を思っ
てか知らないが白の巨人となって降りたからかこの星の文明を一度破壊してしまった。

ちなみにこのときの彼女は自分の力をちゃんと理解していなかった、故に起こってしまった悲劇だった。

全てを破壊したアルテラは自分の分身を地上の石室に眠らせた、そして本体の巨人は

別空間で同じく眠りについた。

そしてその眠りについたアバターの彼女を見つけたのがファン族だった。

彼女は人として地上を駆けた、ある時はその手に軍神の剣を握り敵を蹂躪し、ある時は自由気ままに大陸を渡し歩いた。

そして破壊の大王として地上を駆けた彼女は人としてその人生に幕を下ろした。

そして、彼女の本体である巨人アルテラは別空間で自分の分身を地上に送り夢としてその経験を見ていた。

人間界や、冥界、天界に次元の狭間、あらゆる世界、あらゆる場所を彼女は旅した。

そして何千年後、彼女はその眠りから目覚めた。

目覚めた彼女は人として生きるために人の大きさまで体を縮めて強大な自分の力を何十個もの枷で封印した。

そして地上に降りた彼女が地上に降りた時、彼女に転生した私の記憶が蘇った、そして今世の意識と前世の意思が融合して今の私になった。

さて、私の身の上話を長々と話したが具体的に今の私を表すなら【完全体アルテラ】である。

まあこの世界ならこれくらいないと勝てない相手もいるからありがたいといえればありがたい。

まあ、過剰戦力であることは変わりないけどね。
さてと、町の中に結界が張っている場所を見つけたしそこに行ってみるか。

〈学園side〉

墮天使幹部であり今回の事件の首謀者であるコカビエル、彼の計画は順調に進んでいた。
。

教会から聖剣を強奪し、魔王の妹達をおびき寄せて誘拐、そして魔王たちを呼び寄せて戦争へと被害を拡大させる。

彼の計画に多少の不備がありはしたが悪魔をおびき寄せた時点で彼は目的を達成したようなものだった。

しかしだ、今も尚、戦力差が絶望的にひらいているにも関わらず馬鹿の一つ覚えのよ

うに特攻してくる赤龍帝。

そんな赤龍帝に目を向け呆れたように溜め息を吐くコカビエル。

「……興醒めだ。心底興ざめだ、まさかこの程度とは」

「舐めるな!! 墮天使風情が!!」

「舐めないでちょうだい!! 絶対に負けたりなんかしないわ!!」

そんなグレモリー眷属+聖剣使いを見てコカビエルは落胆を覚えた。

彼我の力量差を理解できず、未だ自分たちに勝てる可能性があると思っ
ているお気楽なグレモリー達にコカビエルは呆れながら溜め息を吐いた。

「魔王の妹とはいえ所詮尻の青いガキか、赤龍帝、貴様に問おう、敵わないとわかっていても、なお私に挑む気か?」

コカビエルは一誠に語りかけた。

彼は戦闘が好きだ、血で血を洗う戦争をこよなく愛している。

そして敵であるならどのような手を使っても勝つためには手段を選ばない男だ。

故に敵にすらならない今の彼らに落胆しながらも、そんな彼らと戦いたいと思っ
てる。

そんなコカビエルの言葉に一誠は……

「あつたり前だ!! テメエなんかに負けるわけがねえだろ!!」

その言葉にわずかに口を吊り上げるコカビエル。

その顔は、落胆を表しながらも獐猛な笑みを浮かべていた。

敵がその気なら彼が止めるまでもない、神話の墮天使たる力で存在すら残さず消し去るだけだ。

「それにしても……貴様も哀れだなデユランダル使い」

「……何の話だ？」

コカビエルは哀れみの表情を浮かべてゼノヴィアに語りかけるように話しかけた。

「仕える主が居ないのに、教会の犬としてこの戦場に死にきたんだ。それを哀れとゆわず何という？」

「……何……だと？」

彼女は自分の信念がちよつとやそつとでは揺るがないと確信している。

しかしコカビエルの言葉はそんな彼女に絶望を与えるものであった。

「まだ分からないのか、なら言ってみよう……」

「お前らの仕える聖書の神は……旧き戦争で前魔王達と同じく命を落とした。つまりは死んだのだよ」

コカビエルは拍子抜けするほど自然にこの世の根幹部を丸ごとひっくり返すような重大な機密をあつさり暴露した。

「う、嘘だ……そんなのは出鱈目だ。そう……嘘に決まっている……」

「はあ、せめてもの手向けに真実を話してやったというのに、本当にお前達教会の人間はお気楽なものだ、墮天使の俺が言うのも何だが哀れすぎて涙が出るぞ。まあお前がそれで良いなら別に構わん。神に祈れ、既に死んだ神にな」

その言葉にピシリと、そしてゼノヴィアの全てが粉々に砕け散った。

嘘だと言いたい、まやかしだと叫びたかった。

だがコカビエルの言葉には真実味が帯びており、その淡々とした口調に否応にも納得せざるを得なかった。

そして、

「ははっ……ほんと……馬鹿だな、私は。本当にバカだ……」

ゼノヴィアの頬に涙が伝う。

そして彼女の手からデュランダルが落ちた。

生きる意味を失った彼女にはもう、戦う意思も、力すら存在しなかった。

「そんな彼女を天井の空から見つめるコカビエル。」

「まるで死人だな、そんなに死にたいなら私が今この場で殺してやろうか。死神の真似事など虫唾が走るが、まあデュランダル使いという稀有な存在に対しての少ない敬意だと思えば別に構わんか」

「……………」

反応のないゼノヴィアを見てコカビエルは手に心底残念そうに黒い槍を創り出す。

彼が態々神の死を話したのは理由はあった。

教会の人間であればその話を聞けばその時点で廃人になるだろう。

現に目の前のゼノヴィアは精神が死にかけている。

しかしコカビエルが望んだのはその上でその真実を噛み砕き力と変えて立ち上がってくるのを期待したからだ。

デュランダルという聖剣に選ばれたものならこの身に傷をつけることも出来るかもしれない。

天然の聖剣使いである彼女なら少なからずやってくれるだろう期待をして居たが……結局は彼女も哀れな贄でしかなかった。

「残念だよ、デユランダル使い。さあ、これで終わりだ」

悪魔共が何やら叫び、必死に攻撃をしてくるが全く問題は無い。

雑魚は何処までも雑魚である、例えそれが悪魔であつても。

既に生氣のない目をしているゼノヴィアにコカビエルの槍が投げられた。

そしてゼノヴィアに槍が到達……

パリイン！

「……何だと?」

しかし、ゼノヴィアに槍が到達することはなかった。

何故なら、放たれると同時に粉々に砕け散ったからだ。

まるで何者かの力により破壊されたように。

「くっ、何者だ!」

いきなりの現象に戸惑いを隠せないコカビエル。

周りのグレモリー達も急な状況に呆然として居た。

そんな時だった。

バリイ!

音が響く、まるで何かが軋むように。

バリイイイ!

「部長! 空が!」

いつ早く気づいた一誠が空を指す、その方向にゼノヴィア以外の全員が向いた。

そこには結界で覆われている空に、ちょうどコカビエルから見て十数メートル前の空間に青い亀裂が出来ていた。

「い、一体、何が？」

リアスが戸惑いながらも疑問を喋る。

バリイ！　バリイ！

亀裂が広がる、そしてついに……………

パリイイイイイイイン！！

青白い光とともに空間が壊れた。

そしてその空間から一筋の光が落ちる。

青白い光はゆっくりと地面に落ちる。

「……………ひ、かり？」

そしてその光はゼノヴィアの前に降り立った。

「私は……戦士である」

声が響いた、とても小さい声だが、しかし何故かしっかりと聞こえる声だ。
光は既に消え去り、そこには………

「私は……大王である」

白髪の少女が立っていた、その身に白の衣を纏い。

そして彼女はその瞳を空に浮かぶコカビエルを見つめた。

「貴様は……何者だ」

コカビエルは警戒心を上げながら白髪の少女を見つめて問うた。

コカビエルの問いに皆が皆、耳を傾ける。

彼女の登場に驚いた一同であるが、コカビエルが喋ったことにより呆然となっていた意識が元に戻った。

そしてそんな彼の問いに白髪の少女は口を開きこう呟いた。

力、神気……貴様からは何も感じんは、人間が！」

コカビエルの怒りが光の粒子となって迸る。

その光景にグレモリー一同は思った、まだこんな力を隠し持っていたのかと、本当に俺たちとの戦いは手加減していたのだと。

しかし何故コカビエルがここまで怒りをあらわにしているのだろうか。

そんなものは簡単だ、コカビエルは戦いが好きだ、しかし同時に嫌いなものがある。

それは力無きもの？ 違う。

傲慢なるもの？ 違う。

なんの力も持たない、ただの人が自分の戦いに足を踏み入れる事だ。

戦いを喜びと感じる彼にとって、力無きものとはそれ程までに疎い。

まだ力が弱いものならいい、その先があり、まだ成長するかもしれないからだ。

しかし0が1になることがないように、無価値のものが自分の喜びを妨げるのが何よりも彼の逆鱗に触れたのだ。

「一体どうやってその身でシトリーの結界を超えたのかは知らん。大方何か手品でも使ったのだろう……しかし、だとしても、貴様程度のゴミが、デュランダル使いを守るように私の前に立ちはだかるなど断固として許さん！」

コカビエルは流れ出た自らの魔力から大量の光の槍を作り出した。

「な、何だよあれ！」

一誠は目を見開く、それも仕方がないこと、何故ならココビエルが出した槍の数は見てわかるほど大量に展開されていたからだ。

その数ざっと見100本はあった。

「哀れな人間よ、その身の愚かさに溺れながらそのデュランダル使いと共に、我が前から消えよ！」

そしてココビエルの号令と共に光の槍が白髪の少女とゼノヴィアを貫かんと降り注いだ。

槍が振り切った後の光景を思い、顔を背ける物。

余りの力量差に再度絶望を覚えるもの。

皆それぞれ目の前の槍の雨に何もすることができなかつた。

しかし、彼らは勘違いをしていた。

一体何を？

グレモリー達は知らない、目の前の白髪の少女が何者であるのかを。

ココビエルは忘れていた、強者の中には己が力を完全にコントロールしてまるで普通の人間のように偽って生きている変わり者がいることを。

彼らは知らない、彼らの目の前の存在がとてつもない化け物であることに。

「私は破壊である。そう、言ったはずだ」

声が響いた、そして次の瞬間、彼らの目を三色の光がないだ。

光が消えると、そこには三色の光を放つ機械の剣をもった白髪の少女と、呆然とするゼノヴィアだけがいた。

「な、何だ！ 一体今のは何だ！」

コカビエルは混乱していた、彼は目の前の存在が何者であるかわからなかった。

自分の攻撃が目の前の白髪の少女に消されたと理解していた。

その状況を目の前にで見ていたのだから当然といえは当然だ。

しかし、だと言うのに以前と目の前の彼女からは何も感じない。

その手にある奇怪な武器からも何も感じない。
わからない、目の前の彼女が何者かわからない。

その気配は確かに人間のそれだ、そしてその身からは異端な力は感じない、この場にいなければ街中で何も知らずにすれ違ってしまふほど存在が薄い。

そんなコカビエルを見て白髪の少女は納得をしたよう声を発する。

「お前は私から何も感じないといったな。まあそれは当たり前だ、何せ私自身が意図的に隠しているからな。しかし、お前が知りたいというならいいだろう」

何を？ そんな彼の言葉は発されることはなかった。

何故なら、次の瞬間、彼女からはとてつもないほどの力を感じたからだ。

体が動かない、魔法か？ いや違う、これは体が恐怖で動かないのだ。

そんなコカビエルの気も知らずに目の前の少女は話す。

「……動けんか、まあそれも仕方がないか。恥じることはないぞ墮天使、それは正常な体の反応だ」

「貴さ、まは……何者……だ」

辛うじて声を出すコカビエル。

突然固まった様に動かなくなったコカビエルに、グレモリー達は驚きの目を向ける。

その様子から、彼らは何も感じていないのだろう。

まあ彼女がコカビエルだけにわかる様に力の気配を解放しているのもあるが。

「私か、いいだろう。この名は好かんがあえて名乗ろう、私の名前はアツティラ。かつて神の鞭と呼ばれた破壊の大王である」

アツティラ、破壊の大王、その名を聞いてコカビエルは納得した。

ああ、なるほど納得した。

ただの人間と思っていたが私の勘違いであったか。

彼女はそういうと三色の光る剣の先をコカビエルに向ける。

「私の力を前に、意識を失わないその魂に敬意を称して私の宝具で消し去ろう」

そして彼女は唱える。

彼女の象徴を、彼女が彼女たる所以の武器を。

「命は壊さない、その文明を粉碎する……さようなら」

三色の光が見え回転する、そして光の粒子を撒き散らしながらドリルのように渦が回る。

「【軍神の剣】フォトン・レイ!!」

そして光が星のようにコカビエルに飛んで生き、そのまま彼を飲み込んだ。

光の中、コカビエルは思った。

なるほど神の鞭か、的を射ている。

その思考を最後に、コカビエルという堕天使は、この世から消滅した。破壊の化身である彼女の攻撃は、その魂すら粉碎する。

そして光が消えるとそこには、僅かに空を舞う漆黒の羽が残るだけであった。

第2話 墮天使アザゼル襲来

「……………眠い」

アルテラは私服で町を歩いていた。

コカビエルを倒した彼女はそのまま自分で砕いた空間に戻りその場を離脱した。

その際にグレモリー達が色々と騒いでいたが興味ないので無視した。

それにしても。

「……………私らしくもない」

アルテラは昨日の自分の行いを疑問に思っていた。

疑問とは、なぜ自分がデュランダル使いを助けたのかと言う事だ。

彼女にとって人間とは守る対象である。

それは人間に憧れを持っているからである。

前世が人間だった故に、この世界の人間の扱いが気に入らない。

だから彼女は曹操の罪なき人々を守ると言う目標に協力している。

しかしそれはあくまでも力を持たない人間や、神器の所為で迫害された者達限定の話

である。

他勢力の人間や悪魔に転生した人間、そんな者達は彼女にとって守る対象になり得ない。

なら何故デュランダル使用の彼女を助けたのか？

アルテラは考える。いや、考えるまでもなかった。

「……ふふ、私も存外甘いのかもれんな」

惜しいと思った。ただそれだけだった。

それは何故？

天然の聖剣使いだったから？ 違う。

彼女の魂が可能性に満ちていたからだ。

助ける理由はそれだけで十分だった。

今の私は人であるが本来の私は巨人、そして捕食遊星を喰らった事で遊星の化身から遊星の星霊となった。

星霊とは神とは違い星が生み出した生命であり、神とは一線を記す力を持っている存在。

その力は天地創造すら可能とする権能を有する。

故に神にできることはだいたい可能だ、なので命を持つ魂を見ればその者がどんな星

の元生まれなのか一発でわかる。

そんな私から見て彼女の魂はとても輝かしかった。

「さて、これからどうするか」

今回の件はすでに曹操に連絡しており、等分ここで過ごすことを伝えてある。

せつかく久々の外出なのでこれぐらいしてもいいだろう。

その証拠に今私は駒王町のホテルに泊まっている。

それを伝えた時に曹操の機嫌が変に良かったが、一体どうしたのだろうか？

「……腹が減った」

コンビニで本と弁当買ってこよ、何となく面倒ごとが起きる気がするがすぐ帰れば大

丈夫だろう。

「初めましてだな。お前がアツティラであつてるか？」

何と言うか、フラグとは怖いものだなど実感した私であつた。

買い物に行く途中、スーツを着たイケメンなおじさんに声をかけられた。

その歳でナンパか？　と思つたがその魂の色から彼が人間ではないとわかるのでそれはない。

そして彼は私のことを知っている。

うん、厄介ごとの予感。

「人違いだ……と言つても、既に裏は取れているのだろうな」

「ああ、うちのもんからの情報と、おめえの可笑しい雰囲気だな」

はあ、やはりご飯を我慢するべきだったか……いや、腹が空いたら仕方がないか。

「それで、私に何の用だ？」

「まあそう急かすなよ、立ち話も何だし少し付き合えよ、な？」

それ、拒否権ないよな、それ。

どうしようか、別に倒してしまつてもいいのだが、その後起こる厄介ごとを考える

と……仕方がないか。

「……いいだろう、話ぐらいなら聞こう、墮天使総督殿」

「ツ!!……お見通しつてわけかい。まあいいか、じゃあついてきな」

そう言つて歩き出した彼、私はそんな彼の後ろについて歩き出した。

おじさんに連れられるままきたところはこの時間帯には珍しく空いている居酒屋だった。

私とおじさんはその店の座敷にいる。

「それで話とは何だ？」

「まあそう急かさんな、取り敢えず自己紹介からか？」

「別にいらん、お前のことなら知っているさ、アザゼル」

「だろいな、まあ一応な？」

ふむ、面倒だが仕方がないか、これも礼儀を示す一つだしな。

「よし、じゃあ俺からだな。 随天使総督のアザゼルだ。 趣味は神器の研究、よろしくしようぜアツティラ」

「嫌だ」

「即答かよ、酷いねえ」

アザゼルは可笑しそうに笑う。

上っ面だけの笑いだとすぐ分かる。

「さて私だな、私の名前はアルテラ。一応アツティラの子孫となっている。しかしその名は好かん、故にアツティラでは無くアルテラと呼べ」

「……成る程な、いいぜよろしくなアルテラ」

「よろしくしたくないな」

「さつきからひどくねえか！」

今度は本当に悲しそうな顔をする。

何と無く苦労人臭がするなこのおじさん。

「はあ、話を戻すぜ。この前はコカビエルが世話になったな。本当ならうちの奴がケリをつけるはずだったんだが……」

「知らん、お前たちの対応が遅いのが悪い」

「ごもつともで。その件についてはこちらの不手際だ。もつと早く行動していれば……」

アザゼルは申し訳なきように喋る。

ふむ、墮天使総督とは初めて会うが……成る程、思いの外良心的な人物らしい。

「それで今回の一件、俺達に不手際があった以上、三勢力が集まって会合を開くつもりだ……で、物は相談なんだが、今回の三大勢力の会談。お前さんにも参加してもらいたい」「何故だ?」

いや、だいたい予想できるけど……一応、ね。

「いやなに、コカビエルを倒した奴がいた方が話が進みやすいと思つてな」

やっぱりね、まあ腐つてもコカビエルは聖書に名を連ねる墮天使、それをどこの誰とも分らない人間が倒しとあっちゃ仕方ないかな。

「……で、本音は?」

「面倒ごとの原因はお前にもあるんだからついて来いやコラア……だな」

正直でよろしい。

しかし会談……正直三大勢力の会談なんて興味ないんだがなあ。

天使と悪魔と墮天使が停戦を結ぼうと私にはどうでもいい。

まあ、旧魔王派どもがなんかするだろうが……やっぱどうでもいいな。

私あいつら嫌いだし。

「普通は嫌だろうな、少なくとも俺は嫌だ。だからここは一つ。お前さんの願いを聞いてやるって事でどうだ？ 何せ、今回の一件で三勢力全てに貸しを作る形になったわけだからな。余程のことではけりや、俺もあいつらも叶えてやると思うぜ？」

「願いなえ……正直なところ簡単な願いなら自分で叶えられるしそこまで叶えたい願いつてないんだけどなあ……いや、今思いついた。」

「これなら彼らに頼んだ方がいいか。」

「……いいだろう。日時などは決まり次第連絡してくれ」

「おう、わかった」

私はアザゼルに自分の携帯番号を書いた紙を渡す。

「さて、めんどくさい話も終わった事だし、なんか頼むか？」

「ん、そうだな」

「そう言えばここは居酒屋だったな、話の事ですっかり忘れていた。」

「腹もいい加減空いてきたし丁度いい。」

「私はアザゼルの言葉に甘えてご飯を頼むのんだ。」

「あらかたご飯を食べた私はそのまま家に帰るのだった。」

「その時会計の領収書を見たアザゼルの顔が印象的であった。」

そして数日後、アザゼルから日時の連絡をもらった。
会談が楽しみだな。

第3話 三大勢力会談

おう、俺は兵藤一誠、悪魔に転生した高校生だ。

今日は三大勢力の会談の当日。

俺たちは会談に出席するため会議室に向かっていた。

「さて、行くわよ」

お、どうやら会議室についたみたいだ。

コンコンと部長が会議室の扉をノックする。

「失礼します」

部長が扉を開くと、そこには特別に用意させたというテーブルを囲むようにして、礼装を見に纏ったそれぞれの陣営のトップ達が座っていた。

天使側が天使長ミカエル、

天使に転生した紫藤 イリナ。

堕天使側が総督のアザゼル、

【白龍皇】のヴァーリ。

悪魔側が魔王サーゼクス・ルシファー、

魔王セラフォル・レヴィアタン、

サーゼクスの女王グレイフィア、

そして魔王の妹リアス、

【雷の巫女】朱乃、

【赤龍帝】一誠、

【デュランダル】ゼノヴィア、

【聖魔剣】木場。

「私の妹と、その眷属達だ」

サーゼクスさんが部長を他の陣営のトップ達に紹介し、部長も頭を下げた。

「さて、その席に座りなさい」

サーゼクスさんの指示を受けたグレイフィアさんが俺達を壁側に設置された椅子に促す。

その席には既にソーナ会長が座っていた。

俺たちが全員座るとサーゼクスさんが言う。

「さて、全員「ちよつと待ってくれねえか?」……何だいアザゼル?」

しかしそれを遮るようにアザゼルが割って入った。

自分の話を途中で止められたことに少し不機嫌になるサーゼクス。

そんな彼の気持ちを知ってか知らずかアザゼルは申し訳なさそうに話す。

「いやな、実はもう一人この会談に出席する奴がいるんだ」

どうやらまだきていない人がいるらしい。

「ふむ、それは一体誰だい？ さすがに部外者なら遠慮してもらいたいんだが」

「なに、寧ろ今回の件の中心人物さ、グレモリー眷属達なら知っているんじゃないか？」

「私たちの知っている？……もしかして！」

アザゼルの言葉に心当たりがあつたのかグレモリー眷属一同は驚いた顔をする。

「おう……しかしマジで遅いな。時間はちゃんと伝えたはずだが」

流石に遅いと感じたのか少し焦り出すアザゼル。

もしかしてドタキャンか？ と内心焦り始める。

「まだ始まらないのか？」

「「ッ!!」」

聞き覚えのない声が会議室に響いた。

突然のその声に驚く一同。

その声の主を探そうと周りを見渡す、そして見つけた。

会議室の窓側、不自然に置かれた椅子が一つ、そしてそこには白銀の髪に褐色肌の女性が片手に本を開いて座っていた。

そして見知らぬ存在が現れたことにより御者達が主人を守ろうと警戒を強める。

緊迫の空気が充満する、そしてそんな中でいち早く状況を理解したアザゼルが声をあげる。

「あく、大丈夫だ、警戒する必要はねえ」

と、軽口で答えるアザゼル。

そんな彼の言葉に疑問に思う一同、その中でグレモリー眷属達だけは件の少女を見て

驚いた顔をしていた。

「あつ！ あの時の褐色のお姉さん！」

一誠がいち早く声をあげて件の少女を指差す。

その言葉に顔をしかめる少女。

「褐色のお姉さんとは失礼な。私にはちゃんとアルテラという名前がある」

「え、はい。すいません」

アルテラの言葉に一誠は萎縮したのか、急にしおらしくなり、謝った。

「おいおい、いつから居たんだお前？」

「？ 初めからずっと居たぞ？」

「マジかよ、気づかなかったぜ」

「まあ、気配を消していたし、仕方がない」

アザゼルは本当に驚いたようで顔を驚愕で染める、その後、納得したのかアルテラに自己紹介を促した。

「まあいいや、取り敢えず自己紹介しとけ」

「……それもそうか。では……私の名前はアルテラ。まあお前達にはアツテイラといったほうが想像しやすいだろう」

アルテラの紹介により、この場にいたもの達が目を丸くする。一誠だけは頭に疑問符

を浮かべていたが。

「アツティラ……神の鞭と名高い英雄。成る程、君がコカビエルを倒したというのも納得できる話かもね」

「本人にしては若いですね。その子孫という認識でいいのでしょうか？」

「まあ、ご想像にお任せする」

アルテラは曖昧に返事をする。

わざわざ自分の素性を語るほど彼女も彼らを信用していない。

話が終わったのを確認したサーゼクスは今度こそ話し出した。

久々だな、アルテラだ。

私は今、三大勢力の会談に出席している。

しかしだ、いち早く会議室に来ていたというのに誰も気づかないで私以外の全員が

揃ってしまった。

私自身、声をかけなかったので仕方ないといえば仕方ないが気づいてくれないんじゃないか？

まあ、自分から気配を消しておいていう言葉じゃないだろうけどな。

さて、そろそろ会談が始まるようだ。

「さて、全員が揃ったところで、会談の前提条件を一つ。ここにいる者たちは、最重要禁則事項である『神の不在』を認知していると思っていかな？」

サーゼクスは念のため視線で周りの要するを見る。

私の方を見たときに無言の肯定をしたので大丈夫だろう。

しかしそれがそこまで重要なことなのかねえ。

別にヤハウエ以外にもギリシャ神話ならゼウス、北欧神話ならオーディーン、日本ならアマテラスなどの神はいるので、今更人柱の神がいないと騒ぐ必要は無いと思うんだが。

「では、全員認知しているとして話を進める」

さて、やっと会議の始まりか。

ま、話の内容はどうでもいいな、どうせ和平を結ぶんだろうし。

まあそうしないと、どの勢力も滅亡待ったなしだしな。

さて、聞いているのも暇だしどうしよう。手元の本はもう読み終わってるし……うん、寝よう、そうしよう。

「……神がいなくても、世界は回るのさ」

はっ！　なんか大事な場面を見逃した気がする。

と、いつの間にか話は大体終わったようだ。

目を開けたまま眠っていたが、バレていないよね？

「さて、そろそろ俺たち以外に世界に影響を及ぼしそうな奴らへ意見を聞こうか。無敵の二天龍様たちによ。まずヴァーリ、お前は世界をどうしたい？」

ん？　どうやら今代の二天龍たちの話を聞くようだ。

まあ二天龍たちの争いはもう宿命みたいなものだ。

アザゼルの問いかけにヴァーリは微笑む。

「俺は強い奴と戦えればそれでいい」

ふむ、今代の白龍皇は戦闘狂の様だ。

ん、なんとも希少な星の元に生まれているな、こんな白龍皇は初めてだな。これは面倒ごとが起きる予感がするな。

「じゃあ、赤龍帝、お前はどうか？」

「えー、あつと。いきなり小難しいこと振られても……」

む？……ほうほう、これはこれは、成る程面白いな。

今代の二天龍は本当に真逆だな、これはこれで面白い。

「なら、簡単に噛み砕いて説明してやろう」

く見苦しい話なので飛ばしますく

「……俺の力はリアス様と仲間達のために使います！」

はあ、やっと終わったか、しかし今代の赤龍帝は変態だな。

ドライブが神器の中で泣いてそうだな、哀れな。

「さて、それじゃあ最後に……アルテラ」

「ああ、少し待ってくれないかアザゼル」

アザゼルが私に問いかけたがそれをサーゼクスが遮る。

「……何だ、サーゼクス？」

「いやなに、今更だが彼女にお礼を言おうと思ってるね」

サーゼクスはそう言うのと私に向いてこう言った。

「少し遅めだが、礼を言わせてもらおうよ。君のおかげで未来ある若手悪魔が、妹が救われた。魔王として、兄として、頭を下げさせてもらおう。ありがとう」

「私からも礼を。貴方のおかげで、聖剣も、その使い手も帰ってこられました」

「一応俺もか、ありがとう」

それぞれのトップ達がアルテラに頭を下げる。

「まあ、気にするな。ついでみたいなものだ」

あとは、気分。

そもそも助ける気なんて初めはなかった。

介入したのだから殆ど手違いみたいなもんだし、まあ、感謝されてるならありがたく貰つとこう。

「さて、話を戻そうか。アルテラ、英雄の子孫とは言え人間であるお前が聖書にも記される墮天使を倒した。その上、まだ力を隠しているとききた。その上で聞く、お前はこの世界をどうしたい？」

アザゼルは珍しく真剣な顔で私に質問した。

アザゼルの問いかけに他のトップ達も神妙な顔で私を見る。

ふむ、そこまで気にすることか？

我ながらやった事は異常だが、歴史を遡れば人外殺しをした人間なんてゴロゴロいるだろうに。

しかしここまで真剣に聞かれるとはぐらかすのも気がひける。

ふむ、それじゃあまず彼らの疑問に答えよう。

「先に言っておくが私はどの勢力にも仕えないぞ。面倒だし、何より入る意味がない」
「だろうな、それはわかっているさ」

ふむ、他の二人も頷いてるし、そうなのか。

言う事なくなつたな、どうしようか。

「私は……………」

私が口を開く……………しかし、その瞬間。

世界が止まった。

第4話 三大勢力会談 I I

「……チツ！ やつぱり来やがったか」

アザゼルは忌々しそうに悪態を吐く。

ふむ、周囲の色が無くなっている。

そしてこの力は……成る程神器か、系統から時間干涉系か。

「動ける奴は返事をしろ。状況を確認したい」

そう言つて周りを見渡すアザゼル。

ふむ、トップたちは当たり前として、残りは二天龍、聖剣を持ちが二人と聖魔剣使い、後はリアスか。

「けど、これはいつたい……」

周りを確認していた赤龍帝が疑問を浮かべた。

「ああ……こりやテロだ。外見てみる、面倒つたらありやしねえぜ」

職員会議室の窓の方を顎で示し頭を掻く。

それと同時に、窓の外で閃光が広がり、建物を揺れが襲う。

「攻撃を受けているのさ。何時の時代も勢力と勢力が和平を結ぼうとすると、それを何

処その集まりが嫌がって邪魔しようとするのさ……」

窓に視線を移せば、そこには無数の人影があつた。

あいつらは確か……

「……『魔法使い』、か」

「ああそうだ、アレは『魔法使い』共だな。悪魔の魔力体系を伝説の魔術師『マーリン・アンブロジウス』が独自に解釈して再構築したのが【魔術】・【魔法】の類だ。放たれる魔術の威力から察するに一人一人が中級悪魔クラスの魔力を持つてやがりそうだな。まあ、今は俺とサーゼクスとミカエルで強力無比な防壁結界を展開してるからどうってことはねえけどな？」

赤龍帝の肩を叩きながら笑うアザゼル。

赤龍帝の表情はなんとも言えないものになっていた。

マーリン・アンブロジウスか……嫌な奴を思い出した。

アルテラは脳裏に浮かんだバカを直ぐに端っこに追いやった。

「恐らくは、あのハーフヴァンパイアの小僧を強制的に禁手化状態にしたんだろうな。一時的とはいえ、視界に映したものの内部にいる者にまで効果を及ぼすとは……あのハーフヴァンパイアの潜在能力が高いってことか。ま、俺たちを停めるにしては、出力不足だったようだが」

「ギヤスパーは旧校舎でテロリストの武器にされている。一体何処で私の眷属の情報を得たのかしら。しかも大事な会議をつけ狙う戦力にされるなんて！ これほど、侮辱される行為はないわっ！」

リアスは紅いオーラを出して怒りを主張する。

「ちなみにこの校舎を外で取り囲んでいた墮天使、天使、悪魔の軍勢も全員停止させられるようだぜ？ まったく……リアス・グレモリーの眷属は末恐ろしい奴らばかりだな」アザゼルがリアスの肩に手をポンと置くが、リアスは容赦なくその手を払い除ける。払い除けられたアザゼルは肩をすくめながらその手を窓へ向ける。

すると、外の空に無数の光の槍が現れ、アザゼルが何でもないように手を下ろせば、その光の槍が雨となって地上の魔術師たちに降り注いだ。

魔術師たちは辛うじて防御障壁を展開していたものの、そんなものなどなんなく貫き、魔術師たちを一掃した。

「うわ……すげえ……」

「どちらにしても、これ以上ハーフヴァンパイアの力を高められたらマズイかもな。この猛攻撃で俺たちを留まらせて、時間を停めた瞬間に校舎ごと屠るつもりなんだろう。

……早めに取り戻した方が良いぞ？」

ふむ、簡単なのはその吸血鬼を殺す事か。

しかし彼らがその方法を選択するとは思えないし。さてさて、いったいどうするの
だろうね。

「お兄様、ギヤスパーは私の下僕です。私が責任を持って奪い返してきます。どうか、行
かせてください」

「言うと思っていたよ。妹の性格ぐらい把握している。しかし、旧校舎までどう行く？

外は魔術師だらけだが」

「根城の部屋に、未使用の『戦車』の駒を保管しています。それを使えば」

「なるほど『キャスリング』か。それを使えば相手の虚をつき、何手か先んじれる」

「だが、一人で行くのは無謀だな。グレイフィア、キャスリングを私の魔力方式で複数人
転移可能に出来るかな？」

「そうですね……ここでは簡易術式でしか展開出来そうもありませんが、お嬢様ともう
一方なら転移可能かと」

「俺が行きます！」

グレイフィアの言葉にいち早く赤龍帝が声を上げた。

ふむ、赤龍帝か、しかし今の彼じゃ少し力不足だな。

未だちゃんとした禁手化に至っていないようだし。

私が疑問に思っているとサーゼクスがアザゼルを見る。

「アザゼル、噂では神器の力を一定時間自由に扱える研究をしていたな？」

「そうだが……それがどうした？」

「赤龍帝の力、制御は出来るだろうか？」

「……………チツ」

アザゼルは舌打ちをした、そして彼はおもむろに懐を探り出して……

「おい、赤龍帝。こいつを持っていけ」

赤龍帝に向かって投げる。

それをキャッチしてみると、手にはめるリングが二つあった。

「これは？」

「そいつは神器をある程度押さえる力を持つ腕輪だ。例のハーフヴァンパイアを見つけたら、そいつを付けてやれ。多少なりとも制御の役に立つだろう。もう一つはお前用だ、まだちゃん赤龍帝の力を扱えてないんだらう？ それを使えば短時間だが、代償なしで禁手化出来る。必要になったら使え」

へー、それは興味深い物だな。

ゲオルグあたりが発狂しそうな品物だな。

しかし神器を作り出した神がないというのによくそこまで調べられたものだ。

私はアザゼルに少なからず感嘆した。

「アザゼル、あなたのところの神器セイクリッド・ギアの研究は一体どこまでいつているのですか？」

「別にいいじゃねえか、作り出した神がいらないんだぜ？　少しでも神器を解明できる奴がいた方がいいだろ？」

「研究しているのがあなただというのが、問題だと思っただけ……」

「あー、もううつせえな。……ヴァーリ」

「なんだ、アザゼル」

ミカエルとの会話を適当に切り上げたアザゼルは白龍皇を呼ぶ。

「お前は外で敵の目を引け。白龍皇が前に出てくれば、奴らの統率も多少乱れるだろう
」

「俺としては、旧校舎のテロリストごと、その問題になっているハーフヴァンパイアを吹き飛ばした方が早いと思うんだが」

白龍皇の言葉にグレモリーたちが睨む。

それを見たアザゼルが苦笑をして首を横にふる。

「和平を結ぼうって時にそれはやめろ。」

最悪の場合、それにするかもしれないが、魔王の身内を助けられるのなら、助けた方がこれからのためになるのさ」

「ふむ、まあそうだな。了解した」

白龍皇は苦笑しながら光の翼を展開する。

【禁手化】

『Vani shing Dragon Balance Breaker !!?』

神器から聞こえてくる音声の後、白龍皇の体を真っ白なオーラが覆った。その光が止んだ時、彼の体は白い輝きを放つ全身鎧に包まれていた。

白龍皇は一瞥した後、窓を開いて空へ飛び出していった。

「アザゼル。先程の話の続きだ」

不意に、サーゼクスの声が響く。

「あー……なんだ？」

「神器を集めて、何をしようとした？【神滅具】の所有者も何名か集めたそうだね？ 神

もないのに『神殺し』でもするつもりだったのかな？」

アザゼルはその問いに首を横に振った。

「……備えていたのさ」

「備えていた？……戦争を否定したばかりで不安を煽る物言いです」

ミカエルはアザゼルの物言いに呆れるように言う。

「言つたる？お前から相手に戦争はしない。こちらからも戦争を仕掛けない……ただ、自

衛の手段は必要だ。何回も言うがお前らの攻撃に備えているわけじゃねえぞ?」

「では?」

アザベルは突然真面目な表情になり、呟く。

「……カオス・ブリゲード【禍の団】」

「カオス、ブリゲード……?」

サーゼクスもその存在を知らなかったらしく、眉根を寄せていた。

「組織名と背景が判明したのはつい最近だが、それ以前からもうちの副総督シエムハザが不審な行為をする集団に目をつけていたのさ。そいつらは3大勢力の危険分子を集めているそうだと……中には【禁手】に至った神器持ちの人間も含まれている。……最悪なことに【神滅具】持ちも数人確認してる……」

「そのもの達の、目的は?」

「破壊と混乱。単純だろう?この世界の『平和』が気に入らないのさ。テロリストだ。しかも最大級にタチが悪い……」

「……【神滅具】持ちがいる時点で最悪ですね……」

ミカエルは忌々しそうに呟く。

神をも滅ぼす神器……それを持った者が複数人いるという事実には、サーゼクスも頭を抱えている。

「しかもだ、組織の頭は【赤い龍】と【白い龍】の他に強大で凶悪なドラゴンだ……」
「ツッ!？」

アザゼルの言葉にアルテラ以外の全員が絶句していた……いや、一誠は若干わかっていないようだ。

「……そうか、彼が動いたのか。【無限の龍神】オフィス……神が恐れたドラゴン。この世界が出来上がった時から最強の座に君臨し続けている者……」

サーゼクスは険しい表情を浮かべてそう言い、この場にいる他の皆は表情を曇らせていた。

「その情報は間違っているぞ、アザゼル」

しかしそんな中で否定の声をあげるものがいた。

アルテラだ、彼女の言葉に周りの面々も彼女に顔を向ける。

「おいアルテラ。それはいったいどういう……」

アザゼルが口を開こうとした瞬間、職員会議室の床に魔法陣が浮かび上がった。

『そう！ あのオフィスが【禍の団】のトップなのです!』

何処からともなく響く声にサーゼクスは舌打ちをして眉をひそめる。

「そうか。そう来るわけか！ 今回の黒幕は……ッ！ グレイファイア！ リアスとイツ
セーくんを早く飛ばせ！」

「はいっ！」

グレイファイアはリアスと赤龍帝を職員会議室の隅に行くよう急かせると、小さな魔法陣を床に展開させた。

「お嬢さま、ご武運を」

「ちよ、ちよつとグレイファイアっ☒ お兄さま！」

そしてそのまま光と共に二人の姿は消えた。

第5話 哀れな悪魔 カテレア・レヴィアタン

「どうやら無事に転移したようだ。」

さて、それじゃあ目の前の面倒ごとに向き合うか。

アルテラがそう思い前を向くと床に現れた魔法陣を見て、三大勢力のトップの面々は驚愕の表情を浮かべていた。

「……レヴィアタンの魔法陣」

魔王の呟きにゼノヴィアが反応する。

「ヴァチカンの書物で見たことがある……アレは『旧魔王レヴィアタン』の魔法陣だ……」

魔法陣から現れたのは1人の女性。

胸元が大きく開き、深いスリットの入った何とも露出の多いドレスに身を包む、さながら痴女のようなだ。

何だ、やつぱりお前か。

「ごきげんよう、現魔王のサーゼクス殿？」

不敵な物言いで、サーゼクスへの挨拶を口にする女性。

「先代レヴィアタンの血を引く者……カテレア・レヴィアタン。これは一体どういふことだ？」

サーゼクスに問われた女性、カテレアは挑戦的な笑みを浮かべて話す。

「旧魔王派の者達はほとんどが【禍の団】に協力する事に決めました」

「……新旧魔王サイドの確執が本格的になったわけか……。あらら……。悪魔も大変なことだった……」

アザゼルは他人事のように笑い頭を掻く。

「カテレア……それは……。言葉通りと受け取っていいのだな……。？」

悲しそうな表情を浮かべて言葉を吐き出すサーゼクス。

しかし、そんなサーゼクスをよそにカテレアは誇らしげに口を開く。

「サーゼクス、その通りです。」

今回のこの攻撃も我々が受け持っております」

「……クーデターか」

『現魔王派』に対する『旧魔王派』の反乱。

それをこの和平を願う会谈出するところを見ると余程『現魔王派』が気に入らないらしい。

まったく、悪魔は脳筋なのだろうか？

知的生命体の特権である話し合いはどこいった？

アツティラ時代の私ですら敵軍に攻め込む前は敵の将に和平を持ちかけたぞ。

「……カテレア、何故なんだ……？」

「サーゼクス、それは簡単なことです。」

今日この会談のまさに逆の考えに至っただけなのですよ。神と先代魔王がいないのなら、この世界を変革すべきだと、私たちはそう結論付けました」

至った思考は真逆の、戦乱を望むもの。サーゼクスの顔は更に曇る。

「オーフィスの野郎はそこまで未来を見ているのか？……到底そうとは思えないんだがな……」

アザゼルの問いかけにカテレアは溜息を吐く。

「そんなはずがないでしょう？オーフィスには、力の象徴として力を集結する為の役を担って貰っているだけ。言わばお飾りのトップです。彼の力を借り、一度世界を滅ぼし、もう一度構築します……新世界を私たちが取り仕切るのです！」

そう言っただけ高笑いを始めるカテレア。

それはもう嬉しそうに。ああ、彼女は本当に……

「……哀れだな」

「……何ですって？」

私の眩きが広がった。

それを境にその場に静寂が訪れる。

そして自分の事を哀れと言われたためかカテレアは今まで気づかなかったアルテラに視線を向ける。

そして彼女を見るとまた調子を取り戻したように不敵に笑う。

何だ、私のことを知らないのか……まあそうか、私つて殆ど外に出ないし、英雄派の奴らとしか会ったことないのか、それならこの反応も分かる。

「ふん、誰だと思えば人間ですか？　しかもなんの力も感じない一般人……不敬です、死になさい！」

カテレアはそう言うのとアルテラに向かって特大の魔弾を放った。

そしてその魔弾はそのままアルテラに着弾し爆発を起こした。

自分の魔弾が着弾したのを見たカテレアはサーゼクスに向き直る。

「人間風情が、やはりただのゴミでしたか。まあいい、さて、話を戻しましょう……か……」

しかし、その行動は最後まで続かなかった。

それは一体なぜ？

簡単だ、それは……

「……何かしたのか?」

魔弾が着弾した場所。

そこには傷一つ負っていない無傷のアルテラが以前変わらず椅子に座っていた。

その光景に驚愕するカテレア。

「くっ、ただの人間風情がなぜ私の魔弾で無傷で座っている!」

「さてな、自分で考えればどうだ?」

アルテラは不敵な笑みをカテレアに向ける。

別にこれといって特別な事はしていない、アルテラは文字道理、
“ただ座っていた”
だけだ。

アルテラの言葉にプライドが刺激されたのか怒り狂うカテレア。

「たかだか人間ごときが調子にのるな!!」

「沸点が低いな、まあいい。すまないが彼女の相手は私がしよう。構わないか?」

アルテラは念のためアザゼルたちに問うた。

私の問いにサーゼクスは苦渋の表情で考えている。

「いや、しかし……」

「構わねえぜ、お前がやらなきや俺がやっていただろうしな。それにどうせもう手遅れ
だぜサーゼクス。すでに彼奴は敵だ、魔王なら、それくらいの事は分かるだろう?」

「……そうだな、けど最後に……カテレア。降りるつもりはないんだな？」

「何を当然のことを。ここままでしておいて投降など……ありえません」

「……そうか。残念だ」

そういつてサーゼクスは目を伏せた。

はあ、甘いなこの男は、本当に甘い。

悪魔らしくない悪魔だ、むしろ悪魔的に言えばカテレアの方が悪魔らしいだろう。

まあしかし、これが現代の悪魔の形なのかもしれないな。

私はそう思いながら、カテレアに視線を戻した。

「ここは狭すぎる。外に出ようか、哀れな悪魔よ」

「はっ、良いでしょう。格の違いを見せてあげましょう」

私とカテレアは外に歩いていった。



カテレア・レヴィアタンは苛ついていた。

今回の作戦は協力者から送られた情報を元に練られ、ハーフヴァンパイアの神器を使つて時間を止め、魔導師たちの物量で時間稼ぎをしているうちに動けない彼らを倒す算段だった。

オフィスから蛇をもらった私なら各勢力のトップたちを殺すことができると思っていた。

しかし、そんな彼女の思想は一人の人間によって破綻した。

いや、破綻したといったが少し違う、どちらかと言えば修正可能で些事にもならないものだ。

本来ならそれぞれのトップの誰かと戦うつもりだった。

しかし何でかその場にいた人間と戦うことになった。

私は目の前の人間に視線を向ける。

やはり何も感じない、力がある者は何かしら気配を感じる、それは人間にも当てはまる。

禍の団には英雄派という神器を持った人間たちの集まりがある。

そんな奴らでも力や気配を感じるのに目の前の存在から何も感じない。不自然なほど気配が薄い、注意して見ないと見失いそうなほど影が薄い。

「はん、空を飛べないとは、人間とはやはり劣等種ですね」

「ああそう、どうでも良い。さて……」

私の皮肉も何のそので無視してこちらに向かって手招きをしてこう言った。

「ハンデをやろう」

「……は？」

何をいつているんだこの人間は。

「これから五分間、私は防御もしなければ攻撃もしない。私を殺せばお前の勝ち……」

面白いだろう？」

「……本気で言っているのかしら？」

私は頬がひきつるのを感じた、何だこの人間は、理解できない。

そして私の中で一つの結論が出た。

相手が何者であろうともう関係ない、こいつは私が殺してやる！

「身の程をしレエ！ 人間如きガア！」

カテレアの周りに大量の魔法陣が浮かび上がる。

その大きさは半径10メートル、そしてその一つ一つから最上級悪魔クラスの魔力を

感じる。

腐つても旧魔王の家系、その魔力量は現魔王と遜色がない程高い。

そして全ての魔法陣から極大の魔弾がアルテラに向かって降り注ぐ。

大地を削り、余波で木々がへし折れ、爆音が響く。

無限と思われるほどの魔弾の雨が降り注ぐ。

流石に疲れたのか魔弾を撃つのをやめるカテレア。

未だ砂煙が舞っているがあの魔弾の雨だ、いくら魔王でも無傷では済まない威力だ、

何の力もない人間が耐えられる威力ではない。

「はは、大口を叩いた癖に所詮この程度か。やはり人間は劣等種でしたね」

カテレアは自分の勝利を確信した。

アルテラを殺した故か先程までの怒りも静まっていた。

そして無駄に警戒していた自分を恥じた。

己が真なる魔王と思っている彼女は無駄に力を使ったことに恥じていた。

ある程度自分を恥じた後彼女は本来の目的であるサーゼクスたちの元に向かおうとした。

しかし、彼女は知らなかった。

自分が相手になっているのが……

「……………五分経過。時間切れだ」

化け物である事を。

「……………なっ！」

声が響いた、その声が聞こえるのはあり得ない。

カテレアは振り返る。

そして自分が先程まで攻撃していた地面を見る、未だ砂煙でよく見えないが、そこに人影が浮かび上がった。

そして次第に砂煙が晴れていく、そしてそこにいたのは……

「大体旧魔王の二分の一の実力か……その程度でよく真なる魔王を語ったものだ」

大きなクレーターができていた。

地面は焼け焦げ、大地はえぐれている。

しかしその中心地点だけは以前と無傷、そしてそこには無傷のアルテラが眠そうに欠伸をしていた。

それを見たカテレアはあり得ないものを見るようにアルテラを見て声をあげる。

「馬鹿な！ 一体どうやって」

「先程も行ったが自分で考える……と言いたいが良いだろう。冥土の土産だ教えてやろう。まあこれといって何かやっていた訳じゃない、私は防御もして無ければ攻撃もしてない。そう、ただ『立っていただけ』それだけだ」

「あり得ない！ 現魔王ですら重傷を負う威力だぞ！ 何の力も持たない人間如きがどうやって……」

カテレアはアルテラの言葉に否定の声を上げる。

しかし事実アルテラは立っていただけだけだ、アルテラには対魔力スキルがある。

その効果は自分のランク以下の魔術、魔法の無効、ランク以上なら半減の効果がある。詳しい説明もあるがぶつちやけ面倒なので省く、簡単にいえばアルテラの対魔力のランクよりもカテレアの魔力の強さが弱かった故、魔法が無効化されたのである。

「さて、五分間もたった事だし反撃させてもらおう」

「人間が！ 調子に乗るなあ！」

カテレアはアルテラに向かって再び魔弾を放つ。

「無駄だ」

しかし魔弾はアルテラに当たる前に煙のように霧散した。

「なっ！ 馬鹿な！ あり得ない！」

カテレアは顔を赤くしながら攻撃を続ける。

しかし先程の焼き増しのように魔弾はアルテラに当たる前に霧散する。

「はあ、いい加減にうざいな、フン！」

アルテラが地面を蹴ると地面が陥没した、そして一瞬のうちに空飛ぶカテレアの前に到達した。

「なに！ ガアッ！」

そしてそのままカテレアを頭から蹴り落とす。

地面に向かって落ちるカテレア、あまりの威力に地面にクレーターが出来上がった。

ただ蹴られたただけだというのに体がボロボロに傷ついていた。

アルテラの攻撃はどんな攻撃も破壊の特性を得る。

故にただの蹴りであろうと彼女の攻撃は破壊の一撃となる。

「カハッ……くそ……なん……で」

地面に縫い付けられたカテレアが悪態を吐く。

「いったい、何が……」

足音が聞こえる、ザッザッとこちらに近づいてくる。

「何で、か。別に難しい話ではないだろう。お前が私の力を見誤った、ただそれだけだ。そもそも【フオーレドウン・バロール・ビュウ停止世界の邪眼】で止まっていない時点で私が何かしらの力、または圧倒的な実力を持っていることくらい予想できたと思うが……まあ、今更な話か」

「ふふ、戯言を、真なる魔王である私が扱えない力があるわけじゃない！ これで貴方を今度こそ完膚なきまで殺してあげる！」

アルテラの制止を無視してオーフィスの蛇を飲み込むカテレア。それと同時にカテレアから黒い魔力が溢れ出る。

「はははは！ 素晴らしい！ これがオーフィスの力、これが無限。先程までの痛みが嘘みたい！」

ハイテンションになったカテレア、そんな彼女を同情の視線で見つめる。そしてカテレアは高らかと喋ろうと……

「さあ、この力で貴方を殺し……て、あげ……る」

したが、その言葉は続かなかった。

アルテラを見つめるカテレアは声が出なかった。

いや違う、声だけじゃない、身体もまるで石になったように動かなかった。

そんなカテレアの状況を見ているアルテラはため息を吐いた。

「だから言ったのに……馬鹿な奴だ」

何故カテレアがこんな事になっているのか知っているアルテラは呆れたようにため息を吐く。

「どう……貴方……は、いったい……何な……の？」

「私か？ そういえば名乗っていなかったな。私の名前はアルテラだ」

カテレアがアルテラのその名を聞くと、顔がどんどん青くなっていく。

「ふむ、やはり感じるか。さて、自分がどうなっているのかわかっていない顔だな。まあ少ない親切心だ、教えてやろう」

アルテラはそうしてこう言った。

「お前はオーフィスの蛇を飲み込んだ。そのお陰で確かにオーフィスの力の一部を得ることができた。それ故に、私という生物を理解してしまった。それがその状態の原因だ」

アルテラは普段、気配遮断の他に、自らの存在を偽る封印をかけている。

しかし無限と夢幻ドラゴンたちという最強のドラゴンたちにはこのスキルも封印による偽装も意味をなさない。

故にオーフィスの力の一端を得たカテレアは、今まで感じることのなかったアルテラの本当の気配を感じてしまった。

つまりカテレアは恐怖で動けなくなっているのだ。

「……………」

「…………精神が死んだか。魔力が多くても精神力は弱かったようだ。まあ仕方がないか…………まったく、オーフィスの力の一端を得たとしても私に勝てるわけないだろう」

オーフィス自身との戦闘なら今の自分でもどちらが勝つかわからない。しかし、オーフィスの力の一端を得た程度の相手に負けるわけがない。アルテラは興味を失ったようでもうでカテレアに背を向ける。

もう、彼女の精神は死んだ。

直視してしまつたから、彼女が何者であるのか、自分が相手にしているのがとんでもない化け物であると理解したから。

「はあ……虚しいな」

ポツリとアルテラはそう呟いていた。

「おやおや、負けてしまったのですかカトレア？」

戦場であるこの場所には場違いなほど陽気な声が響いた。

そしてアルテラは振り返った。

そしてそこにいたのは……

「どうも初めまして、可哀想な人間」

そこには緑のスーツとシルクハットを被った男が笑顔で立っていた。

「取り敢えず、死んでくださいな」

そうして男は手に持っていた槍でアルテラを突き刺した。

第6話 魔神降臨 無垢なる絶望

「取り敢えず、死んでくださいな」

そうして男は手にもった槍でアルテラを突き刺した。

「嫌だ」

バライツン！

「何！」

しかし槍は刺さることなくアルテラの肌に触れた瞬間、砕け散った。

「くっ！」

槍が砕けたのを確認した男は後ろに跳びのきアルテラから距離を取った。

そして砕けた槍を見てやれやれといった表情で砕けた槍を捨てた。

「はは、まさか不滅属性を持つ槍が砕かれるとは、少々驚きましたよ」

「……お前は誰だ？」

アルテラは男に問いかける。

そしてこちらを遠目で見ていたサーゼクスたちがこちらに歩いてきた。

そしてアルテラの目の前の男を見てサーゼクスとセラフォルは顔を驚愕で染めた。

「嘘……どうして」

「……なんで君が」

「ん？ おやおや、誰かと思えばサーゼクスにセラフォルージュやないか、お久しぶりだな。どうしたんだ、そんな顔をして？」

二人の顔を見て男は笑顔で挨拶をする。

「さて、自己紹介がまだでしたね。私の名前は、レフ・ライノール・フラウロス。フラウロス家の当主です。ま、既になくなった家系ですけどね」

男の、レフの言葉に周りの者たちは驚きの顔を浮かべた。

「フラウロス……まさか、滅んだはずの悪魔の家系の者もいるとは。しかしサーゼクス、なぜそんなに驚いているんですか？」

サーゼクスとセラフォルージュのあまりの驚愕具合にミカエルは疑問を浮かべた。

そんな彼の言葉にレフが笑顔で答えた。

「何、簡単ですよ。だって私は死んだはずの悪魔なんですから」

「ツ……やはり、そうなのか、レフ？」

二人の会話に理解が追いついていない一同。

「……どういことだサーゼクス」

アザゼルの声にサーゼクスは弱々しく喋りはじめた。

「私とセラフオルーはレフと親友だった。しかし彼は古の大戦で二天龍から私たちを守るために身代わりとなって……死んだ」

「ええ、私は二天龍の攻撃により命を落としました」

サーゼクスの言葉に補足をしたレフ、話を理解したアザゼルは喋る。

「つまりは何か、死んだはずの奴が生きていたため驚いてるってことか?」

「ええそうです。しかしレフ……まさか貴方もそちら側なのですか?」

サーゼクスの問いにレフは笑顔を浮かべて答える。

「ええ、勿論ですとも」

「そんな……どうして! 私たちは親友だったじゃない」

「どうして? 親友だった? はは、簡単ですよ。サーゼクス、セラフオルー、今だから

言っておきますけどね、私は貴方達のことを……」

レフは言葉を止めると、顔に三日月の笑みを浮かべながらこう言った。

「大嫌いだったんだよ!」

「ッ!!」

レフのいきなりの豹変に驚く一同、しかしレフはそんなのお構いなく叫ぶ。

「ああ、嫌いだとも、なんせ貴方は全てを持っていて、力も、名誉も、生まれながらにしてなんの力を持たない私なんかとは比べ物にならないほどに。いつも思っていたよ、ど

うやっってお前を蹴落そうかと、どうやって殺してやろうかと。なのに友達？ 親友？

はは、笑わせる、そんなの一度だって思ったことなんてないわ！」

「……そんな、レフ……」

「そんな私が、お前達のいいように話が進むのを見ていると思ったのか？ ましてや家族を墮天使に殺された私が和平を許すと思ったのか？ もしそうならサーゼクス、お前はとんだ馬鹿野郎だよ！」

レフの家族は大戦中に当主のレフがいない時を見計らって攻め込んだ墮天使達によつて殺されたのだ。

ひとしきり喋ったレフは立ったまま固まっているカテレアに近づく。

そんな中でアザゼルがレフに疑問を投げかけた。

「ちよつと待てよ、なんで死んだはずのお前が生きているのか答えてないぜ？」

アザゼルの言葉にハツとなる一同。

そんな彼の言葉にレフはなんとなしに答えた。

「なに、我が主に蘇らせてもらったのさ」

「主だと……オーフィスのことか？ しかしあいつに悪魔を蘇生させる力なんて」

「オーフィス？ はは、そうか！ お前達は知らないのか。いや、一部の禍の団の者達も知らなかったな。ひとつ言っておこうアザゼル。禍の団は既に解散している」

「何だと!」

レフの喋った事実には驚く一同。

いつの間にか、時間停止が止まっているが、それすら気づかないほど驚いている。

いつの間にか戻ってきていた赤龍帝らもレフの話聞いていたのかその顔を驚愕で染めている。

その事を知っている私は何となしにその話を聞いていた。

「じゃあ、お前の言う主とはいつたい」

「……いいだろう、冥土の土産に教えてあげよう」

レフはそういうとカテレアに近づき一枚の紙を取り出し、彼女に貼り付けた。

するとさっきまで固まっていたカテレアが急に倒れ痙攣し始めた。

いきなりのことに驚く一同。

「何をしたんだ、レフ!」

「なに、少し細工をしただけさ。私一人では真の姿になるのに魔力が足りないのね」

「真の姿……だと? それはいつたい……」

サーゼクスがその言葉を言い切ることはなかった。

地面から黒い泥が吹き出す。

そしてカテレアとレフを黒い泥が包み込んでいく。

そして泥はどンドン盛り上がっていき、そして一つの柱を形作った。

「何だ、あれは……」

植物の大樹の見える柱、しかしその肌は肉塊のようにブヨブヨで生き物の瞳が何個も付いている。

その余りの異形さに、醜さに、奇怪さに、アザゼルたちも後ずさる。

「……何ですか。この禍々しい魔力は」

ミカエルは異形の柱から溢れ出る黒い魔力を見てその禍々しさに警戒する。

皆が異形の柱を見つめる中、アルテラは眩いた。

「………チツ、魔神になったか、面倒だな」

「なに？ おいアルテラ、お前なんか知ってるのか？」

アルテラの眩きに反応したアザゼルが問うた。

その問いに首を縦に振ることで肯定するアルテラ、そして皆に聞こえる様に語り出した。

「あれは魔神。昔一人の人間が召喚した悪魔の内の一柱、それがあの異形の柱の正体。どうやらあの悪魔の体を依り代に顕現したらしい」

アルテラの説明した事実には驚くものたち、特に悪魔たちの驚き様は異常だった。

「おいおいマジかよ、あれが魔神だと？ バカ言ってるんじゃないやねえよアルテラ。もしそう

だとしたら……」

「如何だろうな、しかしアレが本物であれ偽物であれ、今この場では脅威であることには変わりない」

『その通りだ!』

私たちの言葉に目の前の柱が声をあげた。

それは先程までレフであったものだった。

『死んだ私のはかの王に蘇らせてもらった。そして新たに力を得た私の力は旧魔王たちよりも上だ!』

そう高々と喋るレフは柱についた瞳を全開にする。

「かの王……やっぱりお前達の主つてのは……だがありえない。もしそうだとすると死んだはずの奴を蘇らせるなんて……」

理解した事実にあザゼルが否定の声を上げる。

しかしそれをあざ笑うかの様にフラウロスは断言する。

『バカめ、我らが王がそう簡単に滅びるものか……ぐ、グガガガガガ!!』

「な、何だよ、あいつ急に苦しみ出して……」

レフの急変に赤龍帝が気味悪そうに見つめる。

「まあ当然だろう、いくら同じ悪魔とはいえ、アレは次元が違う。アレを体に宿して元

あつた魂が無事でいられるわけではない。恐らくアレ本体に意識が侵食されているのだらう、あれはもう手遅れだ。あれはレフではなく、魔神そのものだ」

『その通りだ、人間』

レフとカテレアだったものが声を上げる。

『我が名は魔神フラウロス。七十二柱の魔神の一人。過去、現在、未来、全てに汝らの存在する意味はない。故に汝らを焼却する』

フラウロスの宣言と同時に植物の根のようなものが大地から盛り上がりる。

そして次々とその根で周りの魔導師達を捕まえる。

「あいつ、仲間を！」

根に捕まった魔導師達は何かを吸われたように干からびる。

そしてまた次の標的を探すために根が広がる。

「ひ、酷い……」

「見た所魂を喰らっているみたいだな。例えるなら植物が栄養を得るために根を伸ばすように。おいお前ら、あの根に捕まるなよ！」

「見れば分かる！」

アザゼルの分析に周りも同感のようで声を上げた。

「くらっちやえ！」

セラフオールが氷の魔術で根を凍らす。

しかし直ぐに氷を砕きその根を伸ばしていく。

そして魔王達の結界に到達するとその大きな根で結界を殴りつける。

「くつ、なんて威力だ、このままでは……」

一段と結界に魔力を注ぐトップ達、さらに他のもの達も魔力を注ぐ。

「このままじゃジリ貧だぞ、どうするアルテラー！」

なぜ私に聞く、しかしアザゼルの言うことも最もだ、いくらトップ達でも魔力には限界がある。

トップ達なら根を避けることも可能だろうが、この場にいる若手悪魔達の何人かは死ぬな。

白龍皇も迫る根を迎撃するので精一杯。

うん、本格的にピンチではないか？

本当どうするか……別に、勝てないことはないが、封印を一つ解く必要があるな、しかしそうすると気配遮断が無意味になるから周りの被害が……はあ、仕方がない。魔神が現れたのは予想外、少し早いがここで犠牲を出すぐらいならやる方がマシか。

「はあ、仕方がない……おい、白龍皇、いや、ヴァーリ・ルシファー……」

「……何だ、アルテラー」

アルテラのいきなりの言葉に周りの誰もが驚きの顔をした、しかしそんな事を気にしないアルテラはそのまま話を続ける。

「面倒だがアレを使う。数分魔神を惹きつけろ」

「ふむ、それで俺に何か得があるのか？」

「お前は馬鹿か？　ここでトップ達が消えれば闘争どころではないぞ？……それにお前とは約束したと思うが？」

ヴァーリはおどける様な仕草をすると翼を大きく広げ魔神に魔力の塊を発射する。

その一撃に抉れた魔神は再生したものの次々と飛んでくるヴァーリの攻撃に伸ばす根を止めヴァーリを標的にした。

そのお陰で攻撃の手が緩まった。

「おいアルテラ、どう言う事だ？……ヴァーリと一体何を約束した、それになぜヴァーリの本名を……」

「その話は後だ、今は目の前の状況を何とかしないと」

「……チツ、それもそうか。おいサーゼクス、俺が出る」

「良いのか？」

「ああ、丁度試したい物もあったしな」

そう言うのアザゼルは懐から金色の小さな槍を取り出す。

「それじゃあ、俺は行くぜ」

そう言うアザゼルは空を飛び上がる。

一体どうするつもりだ？

「さて、俺も少しは働くとするか……禁手化！」

「えっ？」

アザゼルの言葉に驚く一同。

アザゼルを黄金の全身鎧が包み込む。

背中から十二枚もの漆黒の翼を出しながら天に座すアザゼル。

ほう、神器を解析するだけでなくこれほどの物を作り出すとは、中々やるなアザゼル。

『『白い龍』と他のドラゴン系神器を研究して作り出した、俺の傑作人工神器だ。こいつ

ダウン・フォール・ドラゴン・スピア

の名は『墮天龍の閃光槍』その擬似的な禁手化状態『墮天龍の鎧』だ。もつと華々しい

登場をさせてやりたかったが、まあこの状況じゃ、しょうがねえか」

「ハハハ、まさかそんな物を隠しているとは、やはり凄いなアザゼル。出来れば今すぐ戦

いたいところだが……」

「ゲッ！ 面倒くさいな、嫌なんだが」

そう言うアザゼルは光の槍を背後に展開する。

しかしその数が異常だった、数千にも及ぶ光の槍がアザゼルの背後に現れる。

「禁手化によって底上げされた俺の魔力。いくら魔神とはいえ悪魔であるお前にはキツイか？ まあ良いか、さあ、喰らえ！」

アザゼルの号令とともに何千もの光の槍が降り注ぐ、その光景はまるで天から星が落ちるが如く、墮天使の裁きが魔神を蹂躪する。

「うわあ……ヤバいなあれ」

「二つ一つが上級悪魔を滅ぼす威力だ、全く、物騒なものを作ったものだ」

「同感です」

アザゼルの無双ぶりに呆れるサーゼクスとミカエル。

周りの面々も苦笑気味だ。

「人が頑張ってるのにひでえ奴らだな……しかし凄い再生力だな、効いてるのか、これ？」

アザゼルは目の前でどんどん削れて行く魔神を見つめる。

しかし削れたところからすぐに再生しているためキリがない。

同じく魔弾を飛ばしているヴァーリも魔力の消費具合に冷や汗を流している。

地上のもの達も再び迫ってくる魔神の根を攻撃しているが次々と回復する魔神相手に押され気味だ。

「くっ、状況は変わらず劣勢ね……けど、あの再生力は一体……」

「簡単だ、あの根が地脈から魔力を吸い上げているんだ、あの根を大地から離さない限り再生は止まらないだろう」

「じゃあ、一体どうするんだよ!」

アルテラの説明した事実禁手化して攻撃をしている赤龍帝が声をあげる。

確かに、あの根をどうにかしない限りこちらに勝ち目はない。

しかしな赤龍帝、なぜ私が時間を稼がせていると思う?

「……………ふ、頃合だ、ヴァーリ!」

「ふん、やっとか、アザゼル下がるぞ!」

「あん? 何でだ、オウ!」

アザゼルの言葉を聞く前にアザゼルの首根っこを引つ張り交代させるヴァーリ。

それを見たアルテラはサーゼクス達の結界から出て魔神に歩いて行く。

「ちよっ! アルテラさん!」

「何をやっているの!」

アルテラの行動に驚く一同。

しかしアルテラはそんな事を気にせず魔神に歩いて行く。

勿論そんな無防備なものを魔神が見逃すはずもなく、標的を失った根はアルテラに殺

到する。

「危ないー！」

アーシアが叫ぶが、すでに根はアルテラの目の前だ、根がアルテラを飲み込む……しかしその瞬間。

「……顕現せよ、軍神の剣よ」

その声が響くと光とともにアルテラに殺到した根が破壊される。

黒焦げに焼けた根が灰となり黒い粉が舞う。

そこにいるアルテラの手には三色の光の線が刀身となっっている機械的な剣を持っていた。

『おおおおおおお……』

魔神が声にならない悲鳴を上げる。

アルテラの攻撃には破壊の属性が付与される。

アルテラの破壊が一時的に魔神の再生を上回り、一瞬再生が止まる。

ほんの刹那の時間、しかしアルテラが近づくには十分な時間である。

アルテラが大地を踏みしめドンツ！と蹴る。

そして一瞬にして魔神の本体の柱に到達した。

そしてアルテラは地面に剣を刺す。

すると巨大な魔法陣が展開される。

その魔法陣は魔神の柱が入るほど大きい。

「これは……転移陣？」

この魔法陣の効果に気づいたサーゼクスが、そうあたりをつける。

「……空間指定、座標固定……転移、開始！」

アルテラの声とともに光が魔神とアルテラを包み込む。

そして次の瞬間、光と共に魔神とアルテラが消え去った。

彼女達が消え去った後には、魔神の燃えかすと、無残に抉れた大地が残るだけであった。

「おいおい、これで終わりなのか？」

「ああ、これで成功だ」

あまりの呆気なさにアザゼルが言葉を溢す。

その言葉に禁手化を解いたヴァーリが肯定する。

あまりの呆気なさに、惚ける一同。

「……………はあ、どうする、この状況」

サーゼクスは壊れた校舎と、混沌とした皆を見てこの後にある話し合いを思い浮かべ、ため息を吐いた。

さて、魔神と転移したアルテラは一体どうしたのか？

「さて、やっと二人になれたな魔神よ」

魔神との転移を成功させたアルテラは目の前の魔神を見据える。

ここはアルテラが作り出した別世界、アルテラが魔神を連れて来るために作った擬似的な固有結界。

先ほどの時間で結界空間を作るのと転移陣の場所指定から発動までをやっていたのだ。

この空間には地上のような大地があるものの、しかし周りには木一本すら生えない荒野が広がっている。

その場で作った固有結界故見た目は味気ない。

『がああ！ やつてくれたな、人間！ 殺してやる！』

アルテラから受けた傷が再生した魔神は傷を与えたアルテラに怒りを向ける。
そして大地から魔力を吸い上げ根を伸ばす。

『ハハハ！ 魔力がある限り私は不滅だ！ お前がどんな力を持っていようと不死身の私には勝てない！』

そう高らかに宣言する魔神を見つめるアルテラは、魔神のその言葉を聞くと同時にとてもいい笑顔になってこう言った。

「そうかそうか、お前は不死身なのか、なら私がどれだけ攻撃しても死なないんだな。いやあ、嬉しいな、最近まともな闘いをしていなかったからいい運動になりそうだ」

『……………何？ どう言う事だ？』

「おや？ 聞こえなかったのか？ 私はお前をサンドバッグにすると言ったんだ……………だから、な？」

アルテラは今日一番の笑顔で魔神に話しかける。

笑顔なのに何故か無言の威圧がある。

アルテラは手に握る軍神の剣を振り上げる。

「さあ、魔神よ、魔力の貯蔵は十分か？ 私は……………十分だ！」

アルテラはそう言うとうちに自分に施した封印を一つ解いた。

それと同時に周りを災害的な業風が吹き荒れる。

ただそれだけで大地が砕け、魔神の根が蹂躪される。

余りに暴虐、余りに理不尽、この世の絶望を体現したアルテラは魔神にその歩みを進める。

『何だ、この魔力は……何だ、この震えは……何だ、この感情は！ 不死身である私が目の前の下等な人間如きに恐怖しているだど？ 否、断じて否！ 我は魔神なのだ！ 我らが王に仕える絶対なる魔神なのだ！』

アルテラから溢れる魔力と、その気配に魔神は抵抗を始める。

根から吹き出した暴虐の霧がアルテラに迫る。

しかし無意味。

「私は……破壊である」

アルテラが軽く軍神の剣を振るだけで業風が起き暴虐の霧を粉碎する。

霧は質量を持っているかのように砕ける様に消失した。

『まだまだ！ 汝の過去、現在、未来に意味はない！ 殲滅する！ 情報室、フラウロス！』

魔神の詠唱とともに柱の隙間から何個もの瞳が現れる。

現れた瞳はアルテラを見つめ、キラリと光った。

不可避の攻撃がアルテラを襲う。

しかし……無意味。

「私は……理不尽である」

アルテラが剣を振れば音を立てて不可視の攻撃が破壊される。

『馬鹿な！ 我の不可避の邪眼を無効、いや、破壊するだど！ そんなこと、あつてたまるか！』

自分の攻撃のことごとくを破壊するアルテラに魔神は叫び声の様な怒号をあげる。

ヤケクソ気味に無茶苦茶な攻撃を放つ魔神。

根で叩きつける……腕を凧いだけでチリと化す。

暴虐の霧で飲み込む……剣を振るうだけで業風が起り崩れ去る。

不可避の邪眼で見る……今度は邪眼ごと破壊された。

そしてついにアルテラは魔神柱の根元に到達した。

魔神フラウロスは、余りの理不尽に現実逃避気味になっている。

「……ふむ、ただ蹂躪するのも面白くないから歩いてきたが、思いの外つまらんな。魔神と言われるくらいだから昔戦った軍神と同じぐらい楽しめると思ったが……興奮がめもしいところだ」

アルテラは心底残念そうに魔神を見据える。

「まあしかし、その再生力だけは賞賛に値する。だから、サンドバッグとしては楽しませ

てくれよ?」

アルテラは笑顔でそう言う。と軍神の剣を天に掲げる。

『ま、待て! 辞めろ! 私は……私は!』

「ずっと気になっていたんだ、お前を真ん中で真っ二つに斬れば一体どうなるのか? ……切れた所がくっついて再生するのか? もしくは半分が崩れ去りもう半分から生える様に再生するのか? はたまたプラナリアの様に分裂して二柱になって再生するのか? ああ、とても気になる。同じ不死身である不死鳥は無から再生したが……お前は一体どうなるんだ?」

残酷なまでにピユアな瞳で魔神を見つめるアルテラ。

その表情にとてつもない悪寒を覚える魔神。

アルテラからしたらとても興味深い事であるがやられる相手からすればたまったものではないただろう。

ゆつくりと魔力を充填していくアルテラ。

『さて、止めろ……私は情報……室、フラウロス……だぞ、汝の過去、現在、未来に意味は……意味は……何故だ、汝の過去がわからない、汝の未来がわからない、汝の現在がわからない……こんな事……は……初めてだ、目の前にいるのに……汝の存在をどこにも感じない……理解できない、こんな事はあり得ないあり得ないありありあり……』

壊れた機械の様になってしまっている魔神。

そんな魔神にアルテラはさらに残酷な事を告げる。

「止める？ それはフリか？ ふむ、成る程、なら遠慮せずにやっていいのかな♪」

とても楽しそうにしてらっしゃる、そしてやっとな魔力の充填が完了した。

「さて、では始めよう。意識を保てよ？ まあ、気絶しても再生するならやり続けるつもりだがな」

まさに悪魔の一言、いや絶望の一言。

「まず手始めに……命は壊さない、その文明を粉碎する……」

アルテラの詠唱とともに軍神の剣が回転を始める、小さき剣に収束された魔力が脈動する。

そして、アルテラの蹂躪の一手が……

【フォント・レイ軍神の剣!!】

圧倒的な魔力の閃光により切って落とされたのだった。

第7話 神の鞭 原初の星の涙

〈学園 side〉

時間は遡りアルテラが魔神を連れて転移した後。

駒王学園では、今回の件について後始末と唯一今回のテロの全貌を初めから理解しているヴァーリを問い詰めていた。

「さて、ヴァーリ。説明してもらおうじゃねえか、あん？」

「まあ、そうカッコしくないでアザゼル。けど今回の件については僕もとっても聞きたいところだね」

「それについては私も同感です。さあ、説明してもらいましょうか？」

三大勢力のそれぞれのトップ達に詰め寄られるヴァーリは苦笑を浮かべている。

逃げようにもアザゼルの開発した一時的に装着者の魔力を封印する手錠によって逃げようにも逃げられなかった。

さすがのヴァーリも観念したのか話を始めた。

「……はあ、わかった。で、何を聞きたい？」

「そうだな、取り敢えず禍の団についてだ、あの悪魔は解散したと言ったが本当か？」

あの悪魔というところでサーゼクスやセラフォルの顔が少し沈んだ。

アザゼルの問いにヴァーリは首を縦に振り肯定した。

「……ああ、概ねあの悪魔の言う通り、禍の団は既に解散している。入っていた俺が言うんだ、見ず知らずの奴よりも信憑性はあるだろ？」

「どうだかな、しかしヴァーリ、いつからだ、いつから禍の団に入っていた？」

アザゼルは複雑そうにヴァーリに聞く、その雰囲気を感じたヴァーリは申し訳なさそうにこう言う。

「あー……アザゼルに拾われる前だな、追っ手の悪魔から逃げる時にアルテラに助けられた」

「……………え、マジでか？」

「ああ、俺がお前のところにいたのはスパイの意味もあつた、まあ、特に何かしろとは言われてなかったから何もしてないが」

「……マジかよ……てかアルテラも禍の団なのか」

だいたい予想していたのかアザゼルの驚きは少なかつた。

他のトップ以外の者達は驚いていた。

「厳密には元だ、下っ端の者達は知らないが今、禍の団の者達は二つの勢力に分かれてい

る」

「その勢力というのは？」

ヴァーリの言葉にミカエルが疑問を投げかける。

「一つは今回のテロの実行犯。禍の団では、旧魔王派と言われていた悪魔達の集まりだ。今の名は知らない、リーダーの名前もわからない。まあ、仮定するなら『魔神の団』とでも言え方がいいか？」

「そうだな、フラウロスっていう魔神の話から考えると数柱いると思う、しかしだとしたら奴らの主は……」

「まあ、アザゼルの思っている通りだろう。しかし今は不特定の事よりもわかっている事を整理した方がいい」

「……だな、それで？ もう一つの派閥ってのはなんだ？」

アザゼルの質問に待つてましたとばかりに喋り出すヴァーリ。

「もう一つは英雄派、主に英雄の子孫の人間たちが集まってできている集団で俺やアルテラが所属している所でもある。主な活動は神器使いの搜索、神器や力によって迫害を受けた子供達の保護だ」

「聞く限りじゃタダの慈善集団だが、本当のところどうなんだ？」

疑り深いアザゼルはヴァーリの説明に納得していないようだ。

その反応も予想していたのかヴァーリは話を続ける。

「いや、目的は人外から人間を守る事だけだ。禍の団に入ったのもそういう者達の情報が入りやすいという理由だった。あんたら悪魔や墮天使が人間にしている仕打ちを考えると当然と言えば当然だろ？」

ヴァーリの言葉におし黙るトップたち、悪魔の方は本人の意思を無視して無理やり転生させて自分の眷属にしている悪魔も少なからずいる。

現魔王のサーゼクスはそのような事を無くしようと頑張っているが未だ実現できていない。

墮天使は未覚醒の神器使いを保護、または殺害している。

一誠もその被害者の一人だ、赤龍帝の神器を持っていたから墮天使に殺され悪魔でありアスに転生され眷属となった。

天使側は特にこれといった事をしていないが、その配下の教会の中には勝手に暴走して無実の人間を殺している者たちもいる。

これらのことを考えれば、英雄派のお題目も仕方がないことだ。

「元々旧魔王派と英雄派は良くぶつかっていた。方や人間を下等な生物と見ている悪魔。方や人外に恨みを持つ人間たち」

「成る程、分裂は必然だったと？」

同じ禍の団でもいがみ合うもの同士が敵対するのは必然のこと。

そう思いミカエルがヴァーリに質問をした。

「俺はあまりそのことに詳しくない。しかし必然であったのは確かだ、その上で俺たち英雄派が三大勢力との関係をどうするか、あんたらが聞きたいのはそこじゃないか？」

ヴァーリの核心をつく言葉にトップたちに緊張が走る。

遠回しにいろいろ聞いているが結局のところは自分たちに害があるのかわからないのかという話になる。

「付け足しておくが、英雄派には【神滅具】所有者が俺が知っている限り三人、幹部たちはアルテラを抜いた全員が神器使いで全員が禁手に至っている。それぞれ最上級悪魔程度なら一人で殲滅できる戦闘能力を持つ。さて、俺たちが三大勢力のとの関係をどうするか。本来ならアルテラの仕事なんだが……」

ヴァーリの言葉は最後まで続かなかった。

学園を突然の地震が襲ったのだ。

あまりに急なことに事後処理をしていたその他の者達、話を聞いていたもの達とグレモリー眷属達は驚く。

「……なんだ、今度は地震か？」

トップ達は突然の地震に驚きこそすれ平静を保っていた。

この地震が起こると同時にヴァーリの顔に安堵の息が漏れる。

「……どうやら、アルテラの方も終わった様だ」

「何？　じゃあこの地震は」

「十中八九アルテラの仕業だろう。全く一体何をしたら別空間の余波がここまで届くというのか。けどまあ、これで俺の役割は終わりか……」

ヴァーリはそう言うのと腕の手錠を無理やり引き千切る。

そして白銀の羽を出し空高く登る。

アザゼルは自分作成の手錠が壊されたことに少し拗ねている。

「まあ、あれでお前を無力化できるとは思っていなかったが、無理やり壊されるとは思わなかったぜ。まあいい、それで、結局俺たち三大勢力とはどうする？」

アザゼルはこれで話が終わりだと悟り最も重要なことを聞く。

「具体的な干渉はない。今俺たちは魔神派への対応で手一杯だ、なので同じ敵を持つものとして協力関係を築きたいと思う」

「それは、僕たち三大勢力の庇護下に入ると言う事でいいのかな？」

サーゼクスの言葉を受けて、不敵な笑みを浮かべるヴァーリ。

「違うな。俺たちは、悪魔、天使、堕天使に続く第四勢力。人間側としてお前らと対等な関係を築きたい」

ヴァーリはそう高らかと宣言する。

それは本来なら実現することは叶わないもの、人外達からすれば人間は取るに足りない存在として扱われている。

そんな人間と対等な関係を築く、それはまさに歴史に残る事だろう。

スケールの大きい話にトップ達以外の者達は置いてけぼりだ。

しかしそんな重要な事であろうに件のトップ達といえど。

「別にいいぜ、俺個人としては是非良好な関係を築きたい」

「僕たち悪魔も構わない、老害どもがうるさいだろうが……まあ、なんとかするさ」

「私たちが天使も構いません。特にこれといって遺恨がある訳ではないですし」

と、以外にも満場一致であった。

これには否定を想定していたヴァーリも目を丸くする。

「……俺が言うのもなんだがいいのか？ アザゼルはどうでもいいとして……」

「おい！」

「魔王のあんたが賛成するとは思わなかった」

ヴァーリの言葉ももつともだ、全てとは言えないが少なくとも悪魔達が人間や転生悪魔を下等な存在として見ている。

そんな悪魔のトップの一人のサーゼクスが何もなくこの件を肯定したのには誰だっ

て驚く。

「まあ君の言うことも尤もだ、確かに今の悪魔達にもそういう風潮がまだあるのは知っている。僕もどうにかしようとして色々としているが上層部の老害どもが邪魔で未だに上手く実行できないでいる」

それは人間を好いているサーゼクスや現魔王達にとつて頭を悩ませていることだ。

「だからね、今回の和平を始まりに悪魔達も変わっていかうと思う。しかし三大勢力との和平では人間達に対する対応が変わることはないだろう。だからこの協力関係を始まりに人間に対する対応を変えるための始まりにしようと思つている」

和平は三大勢力間だけで行われている、その中に人間に対するものはない、結局今回の和平で人間達が虐げられる事は変わらない。

「成る程、つまりは今回の協力関係を始まりに、若い悪魔達の人間に対する認識を改めさせようと言うわけか」

古い時代の悪魔達の認識を変えることは難しい。

なら次代を担う若手悪魔達の認識を変えることで将来この関係が変わるようにしようと言うわけだ。

「そう言う事だ、だから今回の件は此方としても願つても無い事なんだよ」

「わかった、ではこの話はお終いだ。いい返事をもらつて感謝する……最後に」

そう言うとヴァーリはグレモリー眷属の方に顔を向ける。

彼が見ているのは一誠であった。

「……………」

「な、何だよ……………」

無言で見つめられる一誠は耐えきれず喋る。

そして黙っていたヴァーリもその言葉を始まりに喋る。

「正直なところ、俺は今の君に期待していない。未だに禁手の力を十全に扱えていない

君には、ね」

「何が、言いたい」

「今代の赤龍帝が君であることを俺は酷く悲しく思う。白と赤は争う運命とは言え、余りにも結果が見えている」

それはきっと侮蔑だ、同時に哀れみなのだろう。

人間の母と旧魔王ルシファアの家系の父との間に生まれた自分と、これといって何の力も持たない人間であった一誠。

同じ二天龍を宿すもの同士、しかし今の両者には圧倒的な力の差があった。

戦闘狂とも言えるヴァーリにとってこの件はとても残念に思っていた。

「……………だから」

ヴァーリが白龍皇の鎧を纏う。

そして自分の鎧の胸の宝玉を……

「ふん！」

自ら砕き取り出した。

「なっ！」

宝玉が取り出された事により鎧が消えるヴァーリ。

「ふっ、思いの外痛いな、まあ仕方がないか。赤龍帝」

ヴァーリは一誠を呼び手に持っていた宝玉を投げつける。

「うおっ！」

いきなりのことで焦る一誠、飛んできた宝玉を拙くも受け取る。

「これは……何で」

宝玉を受け取るとそれがどう言うものであるか同じ二天龍を宿すものとして知っている一誠は困惑する。

「なに、ただの気まぐれだ。だから受け取れ」

「だけど……」

「赤龍帝、いや兵藤 一誠。もし君に守りたいものがあるなら強くなることだ、力がなければなににも守れない。これからの時代を生きるなら、なおさらね」

ヴァーリはそう言うとき大きく翼をはためかせる。

「また会おう赤龍帝、いつかもつと強くなった君と戦ってみたいものだ」

ヴァーリはそう言うとき魔法陣とともに光となって消えていった。

消えるヴァーリを見つめる一誠は静かにいった。

「ドライグ」

『何だ、相棒?』

「俺は……強くなれるか?」

『お前にその気があるならな』

「……そうか」

そう呟いた一誠の顔はとても晴れやかな表情であった。

くアルテラ side く

神の鞭、かつてアツティラであったアルテラを表した言葉。

その手に持つ軍神の剣を見たものがつけた名前、そしてその名はまさに的を射ていた。

三色の光の線が宙に踊る。

それはまるで星の様に、しかし星ではあり得ない起動で天を駆けている。

「ははは！ うん、いいなこれは、久方ぶりの感覚だ」

楽しそうに巨大な破壊の鞭と化した軍神の剣を魔神に振るうアルテラ。

その一撃一撃が魔神の体を抉り、魔神の一部を消失させていく。

結局のところ、初めに打った宝具の結果は切れたところから引つ付くであった。

疑問が解消されたアルテラは文字どおり魔神柱をサンドバックにして切ったり叩いたりして攻撃している。

しかし案の定ことごとく再生する魔神にアルテラのテンションはこれまでにないほど上がっていた。

今のアルテラの一撃は一つ一つが必殺の一撃、どんな相手もそれを受ければ破壊される。

しかし目の前の魔神は今尚そこにあり続けている。

力を使えば何もかも破壊し尽くしてきたアルテラにとってはこれほど嬉しい玩具は

なかった。

あまりに楽しいので宝具を数回ブツパしたくらいだ。

暇を持て余していたアルテラにとってはこれほど楽しい相手は久方ぶりだった。

しかしいつの日も楽しい時間は長くは続かないもの。

無限に再生する敵に消滅させない威力で攻撃するのにも飽きてきた。

攻撃してみてわかった事だが魔神の再生能力は自動的の様だ、その証拠に現在の魔神の意識は飛びかけている。

まあそれも仕方がない、アルテラの一撃は破壊の一撃、いくら無限に再生する魔神でもその痛みには精神が耐えられない。

これがフェニクスという悪魔であれば精神が死んだ時点で再生は止まるだろう。

しかし先ほども言ったがこの再生はあくまで自動的なもので本体の魔神の意思とは関係なく魔力がある限り再生する。

つまるところアルテラに受けた痛みで死にたくてもその不死身とも言える再生能力のせいで死ぬことも出来なければ、気絶しても体を焼く痛みで気絶することも出来ない。

まさに生き地獄、絶対なる不死性が仇となった結果だ。

「さて、それなりに楽しんだことだしそろそろお終いにしようか」

本格的に飽きてきたアルテラは今尚再生する魔神に向けて喋る。

『や、やつと……終わる……の……か……』

おや、どうやらまだ精神が生きていた様だ、凄いな普通なら廃人確定なんだが、さすがは魔神というところか。

『こ、殺してくれ！ 早く、早く、殺してくれ！』

あ、やっぱり精神死んでるか？ なんか初めの時と全然キャラが違うな。

「ああ、良いだろう。殺してやる」

私は魔力を充填する、今までにないほどの魔力収束に大地が悲鳴をあげる。

そろそろこの世界も限界か、まあだいぶ持った方ではあるか。

充填が完了し可視化できるほどの煌めく魔力が私の剣の柄に収束される。

「さて、最後に言い残すことはあるか？」

『いや、無い……早く殺してくれ！』

異常とも言える死への渴望にアルテラも少し後ずさる。

ふむ、やけに素直だな、傷はもう既に再生しているのに攻撃すらして来ない……ああ、成る程な。

何かに気づいた私は問いかける様に喋る。

「普段の私は力を抑えているんだ、何故かわかるか？ 簡単だ、私が力を使えばそれだけ

で何もかも壊れてしまう。故に私は自分の力を封じることによって抑えている。そして今の私はその封印の一つを解いた状態だ、……」

『……………？ 一体…何が…言いたい？』

急に坦々と喋り出したアルテラに困惑する魔神、しかしアルテラは気にすることなく話を続ける。

「そして枷を解いたことで力と一緒に封じていたスキルも解放された。その名も【魔力吸収】能力は私が破壊したものを魔力に変換して私の貯蔵魔力に吸収するスキルだ。さて、私が何を言いたいかわかるかな？」

私が魔神に聞くと魔神は私が見てわかるほど肌の色が青くなる。

へえ、魔神でも青くなるんだ、ある意味珍しい発見かも。

『何故！……………何故だ、一体何故！』

「何を言っているか全然わからんな。まあどうせ私がお前の体を消失させると同時に魂だけ王の元に逃げる腹づもりだったのだろう、その体はあくまでもレフのものだ、貴様はその体に魂だけ入って支配しているだけに過ぎん……残念だったな。私がここでお前を“完全”に破壊する」

『い、嫌だア！ いやだいやだいやだいやだ！』

私が話を終えるとまるで駄々っ子の様に根を振り回す。

その余波で大地が砕け、私のいる足場も崩れる。

私は後ろに飛び退き暴れる魔神を見つめる。

「ふむ、魔神とはいえ死は怖いかな、だがな魔神よ、私はついさつき言ったはずだ……貴様
は私が完全に破壊すると。だから、これでお終いだ」

私は静かに剣の柄を天に掲げる。

「……マルスに接続、発射まで五秒」

剣の柄から赤い光が天に昇る。

そして魔神の上空で巨大な魔法陣が現れる。

三列に並んだ円形の魔法陣、それは原初の破壊。

アルテラの持つ軍神の剣の真の力。

「二………：……零、臨界点突破。落ちろ」

そして今、神の鞭がその真価を見せる。

この軍神の剣は、剣であるのと同時に座標を指定するポインターでもある。

そして空に展開された魔法陣は道、天から落ちる星の涙を神の怒りと変える破壊の
道。

【涙の星 ティアードロップ・ファクトン・レイ 軍神の剣】!!」

天から落ちる涙の星が、魔法陣を通り神の怒りと化す。

全てを一切合切破壊する破滅の光は魔神を飲み込んだ、それでも飽き足らずに大地をその熱で破壊する。

まさに神の懲罰、天から落ちる光の柱はまさに神の裁きと言えるだろう。

そして数秒後、天から落ちる光の柱はどんどん細くなりやがて消え去った。

光が落ちた大地は破壊され大きな穴が開いていた。

魔力の反応と自分に吸収される魔力で完全に魔神が消滅したのを確認したアルテラは……

「…………ちそうさまでした」

そう、静かに手を合わせるのだった。

荒れ果てた荒野でアルテラは考えていた。

と言うのも魔神を倒したが今更思えばいらん事まで三大勢力に暴露してしまった気

もしないでもない。

魔神の事や、禍の団の事、ヴァーリの事は……まあ、ヴァーリの性格上勝手に名乗っ
ていそうではある。

それに今回の出席したのは和平に乗じて私たち人間も協力関係を三大勢力達と結ぶ
ためだった。

うん、私がいなくなつた後で三大勢力達に詰め寄られて、柄にもなく困惑するヴァー
リが想像できた。

その想像が現在進行形で現実となつているとも知らずにアルテラはため息を吐く。

あく、戻るのはなんか憂鬱だな、絶対色々聞かれるだろうし。

自分が学園に戻る事で起こる出来事を予想したアルテラは如何すればそれを回避で
きるか考える。

アルテラの行動原理は楽しそうなら動く、面倒なら傍観する、が主な行動原理となつ
ている。

それを考えると今回の魔神との戦闘は彼女らしくなかったと言える。

まあ、珍しく戦闘の熱に浮かれていたとも言えるが、ともかく自分の行いを振り返つ
たアルテラ。

そして結局たどり着いた答えとは……

「よし、帰って寝よう」

夢の中に逃げるであつた。

人はそれを現実逃避と言う。

そして彼女は転移陣で駒王町に戻り、ホテルを借りて眠りにつくのだつた。

第8話 オカルト研究部

アルテラはカーテンから入る朝日で目を覚ました。

そして硬くなっている体をほぐす為に伸びをする。

「んん、久しぶりによく寝たな」

と、気持ちよさそうに声をあげた。

如何でもいい事だが私は睡眠を必要としない。

人の形をとっているものの私の本来の姿は白の巨人であるセファールだ、そしてセファールとは遊星の尖兵、捕食遊星が文明を効率よく破壊する為にデザインしたのがアンチセルである。

まあ、破壊する為に生み出したものに破壊されるなんて、飛んだ間抜けである。

話が逸れた、人間が寝るのは活動することで溜まった疲労を取り除く為に体を休める行為である。

破壊する為に完全な者として創造された私に疲労という概念はない。

なので本来睡眠をとる必要がない。

しかし肉体的疲労が無くても心身的疲労は溜まる、本来のアルテラならともかく前世

という人間であった頃の記憶を持つ私にとって普通の人の精神として疲労が溜まる。

最近ではセフアールとしての私に精神が引つ張られていた為、必要以上に睡眠をとることがなかったのだ。

ベットから出た私は乱雑に散らばっている自分の服を拾い、着替える。

別にいうことでもないが、私は寝るときは基本全裸だ、パンツこそ履いてはいるがその他は特に隠れる布もなく綺麗な褐色肌が眼に映る。

前世からそうであったようで私はいたって普通のことだと思っている。

英雄派の女子達には気をつけるように言われているが私は直す気が無いので改善することはないだろう。

だって服を着て寝ると苦しいんだもの。

服を着替え終わり、いつもの服装（となりのアルテラさん衣装）になった私は椅子に座りスマホを見る。

「……………うわぁ、マジかこれ」

私はスマホの画面を見て嫌な気持ちになった。

それもそのはず、私のホーム画面には何十にも及ぶメールや着信履歴が出ていた。

「寝起きでこれは嫌だなあ……………差出人はアザゼルと曹操か、アザゼルは何となく予想がつくが、曹操は何の要件だ？」

私は曹操からのメールを開く。

そしてメールを読んでいくうちに顔が険しくなる。

「……ふむ、元旧魔王派どもが拠点を攻めてきたか、抗争が本格的になってきたな。全くと、平和な世の中はいっ来るのやら」

まあ、人外でもない世の中が平和とは思われないがな。

私の前世では大きな戦争もなく概ね平和だった、しかし小さな小競り合いや、殺人、自殺など、どんな時代であろうとも人が感情を持つ限り争いの芽はなくなならない。

それを理解してるアルテラはそれでもこの世が平和になると信じている。

しかし、その為には……いや、この話はやめておこう。

「……次に昨日の和平の話か、どうやらヴァーリはうまくやってくれたらしいな」

私は人間と言う第四勢力として三大勢力と協力関係を築けたことに顔を綻ばせる。

これで先ず一步、決して小さくない一歩だ、例え人間を下に見るもの達がいても三大勢力のトップ達が決めたことに真正面から文句を言えるものは少ないだろう。

そして次のメールを見ようとしたが電話がかかってきた。

「……間が悪い、こんな朝早く誰だ」

着信者の名前を見た私は嫌々ながら電話に出た。

「……もしもし」

『おう、今度暇か?』

「いきなり何だ、アザゼル」

私は電話の相手のアザゼルの態度に不平を漏らす。

『なんだ、御機嫌斜めか? これは悪いことをしたな……』

「世間話が良い、要件を言え」

いつまでもふざけるアザゼルに私は話を急かす。

『ひでえな、ま、いつか。実は面白い話があつてな……と言うわけなんだ』

アザゼルはまるでいたずらを考える子どものように私に話をしてきた。

その話を聞いた私は……

「ほう、面白そうじゃないか。良いだろうその話乗った」

『そりや良かったぜ』

電話先のアザゼルは嬉しそうに話す。

そこで一つの疑問に思つた私はアザゼルに問うた。

「……今更なんだが、聞かないのか? この前の事」

私はずつと気になつていた事をアザゼルに聞いた。

『ヴァーリの事か? それともお前のことか?』

「どっちもだ。少なからず当人であるお前が私に何も聞かないのは不思議に思ったのである」

もし私がアザゼルなら聞く、気になる事を放っておくと気分がモヤモヤする。

『何だ？ 聞いたら教えてくれるのか？』

「面倒臭いから嫌だ」

まあ、説明する必要がないならそれに越したことはない、それに面倒ごととは嫌いだ、自分の時間が無くなるからな。

『何だそりや、まあ喋る気が無いなら聞く気は無いさ』

「ふーん、で、本音は？」

『めっちゃ聞きたい、そんでお前に愚痴を延々と話してやりたい。面倒ごと押し付けやがって』

「はは、ドンマイ」

今回は第四勢力として私たちが三大勢力と協力関係を結んだ、これが傘下に入ると言うものならそこまでのことはなかっただろう。

しかしあくまでも対等な関係として結んだことで、人間を下等なものとするもの達からの反発が出る。

その為にトップ達はそのもの達に対する対応に迫られている。

「あつ、そういえばアザゼル。ひとつお願いがあるんだが」

『ん？ 何だ、ものによるが別に良いぜ？ 結局会談ではお前のお願いを聞いてなかったしな』

そういえばそうだったな、魔神のことですっかり忘れてた。

まあ、お願いが残ってるならそれを使わせてもらおうか。

「実はな……」

おつす、俺、兵藤 一誠だ。

三大勢力の会談、そして魔神と言われる悪魔の襲撃を乗り越えてから早数日。いつも通りに放課後、オカルト研究部の部室に俺たちは集まっていた。そう、集まっていたんだけど……

「……てなわけで、今日からこのオカルト研究部の顧問をやることになった。気軽にアザゼル先生と呼べ」

部室に来てみれば、スーツを着崩した総督がいた。

「……どうして、あなたがここに？」

額に手を当て、困惑している様子のリ阿斯部長。

そんな部長の質問に答える総督。

「ハッ！ セラフオルーの妹に頼んだらこの役職だ！ まあ、俺は知的でチョーイケメンだからな。女生徒と先生でも喰いまくってやるさ！」

「それダメよ！ って、何故ソーナがそんなことを」

「堅いぜ、リアス・グレモリー。いや、何。サーゼクスに頼んだら、セラフオルーの妹に言えと言うんだ。だから頼んだ」

そんなことで顧問に?! 会長さまのご意向は理解しかねるぜ!

「俺がこの学園に滞在できる条件はグレモリー眷属の悪魔が持つ未成熟な神器を正しく成長させること。まあ神器マニアの知識が役に立つわけだ。お前らも聞いただろうが、『禍の団』、いや、此処は『魔神の団』ってつけたいな組織がある。将来的な抑止力のひとつとして、『赤い龍』とお前ら眷属の名前が挙がった」

「その魔神の団はまた攻めて来るんすかか?」

俺は総督に問うた。

「それはねえだろ。だがまあ、詳しくは俺もわからねえ……てな訳で詳しい奴に来て貰った。良い加減話に入れ」

総督はそう言うのと部屋のソファの方に顔を向けた。

それに続くように俺たちも顔を向ける。

しかしそこには誰もおらず俺も訳が分からず疑問符を浮かべる。

「誰もいませんよ?」

俺がそう聞こうとしたが視界に何か映った。

ソファーに向き直ってみるとそこには白いもふもふとした物体があった。

それを見た小猫ちゃんが呟く。

「……うさぎ、ですか?」

そう、そこにいたのは真つ白いもふもふしたウサギだった。

「あれがウサギですか？ 可愛いですね！」

「はい、可愛いです」

そのうさぎを見たアーシアと小猫ちゃんがそのウサギを抱こうと手を伸ばす、しかしウサギはその手から逃げて総督のいる机の横に飛び降りる。

そして逃げられたアーシアは悲しそうな顔をした。

しかし総督の言った人が、このウサギ？

どう見てもただのウサギみたいなんだけだなあ。

俺がそう思つてウサギを見てみると、総督がウサギに向かって喋る。

「おい、いつまでその姿でいるんだよ。話しにくいから元に戻れや」

と、ウサギに向かって喋る総督。

総督の話を聞いてからウサギが急に光り出した。

そのことに驚く俺たち。

そしてその光は塊はどんどん大きくなる人の姿になっていく。

そして光が晴れるとそこには……

「うるさい奴だな、アザゼル」

「いやこつちのセリフだからな、せつかく話を振つてやつたんだから話に入りやがれ」

そこにいたのは純白の髪に褐色の肌をした女性だった。

「アルテラさん!？」

そこにいたのは、コカビエルを倒した少女、アルテラさんだった。



やあ、魔法でウサギに変身していたアルテラだ。

正直どう出るか悩んだ末にウサギになってオカルト研究部のもの達を驚かせようとしたのだが、どうやら成功のようだ。

なぜウサギかと言うと私がウサギが好きだからだ。

あの赤い目ともふもふ感がなんとも言えない可愛さがあって好きだ。

さて、唐突だが質問だ。

今の私は前と違うところがある、さてそれはなんだ？

まあ、答えは聞いてないがな!

簡単に言えばここにいる私は本体ではなくアバターである。

理由は色々であるが、簡単に言えばそろそろ本体の力を抑えながら生活するのが厳しくなつたところか。

前にも言つたように私は自らに何十もの枷をしている。

しかしその枷も、私という存在を縛るのは難しかった。

何せ魔神柱との戦いの時、ちよつと枷を外しただけでその他の枷が壊れかけたのだ、これには枷を施した私も驚いた。

これじゃ、おいおい力も出せない、これは困つた。

そして思いついたのが自分の分身、アバターであつた。

これなら力の制限はもちろん、本体と分身だから身体的不自由もない。

むしろ何故いままで思いつかなかつたのかと疑問が浮かぶほど、それほどにアバターは今の私にうつつつけのものだつた。

いや、思いつかなかつたというよりもこれは忘れていたという方が適切か。

何せ昔はアバターで過ごしていたんだ、寧ろ何故記憶を思い出す前の私が本体で地上に降り立つたのか、少し疑問が浮かぶ。

まあ私のことだ、アバターが羨ましくて自分自身もと、そんな所だろう。

と、こんな話はこの辺で。

みんなが驚いているがアザゼルに聞かれた話を進めようか。

「さて、アザゼルの言う魔神の団についてだが、アザゼルの言う通りもうここには攻めてこないだろ。元々今回の三大勢力の会談を狙ったものだったようだし、この学園にはもう用はないだろう。だがしかし、もし今度奴らが攻めてきたら、今のお前達じゃ無駄死にするだけだろうな」

私のその言葉で固まるグレモリー眷属達、そんな彼らに私は苦笑した。

いやしかし、もしこの中で魔神に勝てるとして赤龍帝が全力倍加をしてギリギリ勝てるかどうか。

それもフラウロスで例えるなら無限再生がない状態でだ。

正直今の彼らでは私たち英雄派の戦闘員達にすら負けるだろう。

そしてそんなグレモリー達を見かねたアザゼルが喋る。

「何暗い顔してやがる。お前達には伸び代つてもんがあるんだよ。力不足なら鍛えるまじだ。夏休みなんてないと思えよ？」

そう言つてニヤリと笑つたアザゼルは椅子の方へ移動すると、怠そうに腰を下ろしたのだった。

閑話休題

「あの、質問しても良いですか？」

アザゼルの話が終わった後、赤龍帝が手を挙げる。

「なんだ？」

「いやー、なんでアルテラさんがいるのかなあーと思つて」

「そーいやそーうだな……アルテラ」

アザゼルに話を振られた私は赤龍帝のに向きながら話をする。

そして私は何処からかだしたマントを取り出して私と彼らの前を遮るように振る。

そしてマントが消えると驚いたような顔をした。

「え？ それつて」

「ああ、この学園の女子制服だ」

私はマントが通つた間にしまつていた服をそのまま私の服と交換して着替えたのだ。

私の服装を見て何となくわかつたグレモリー達は驚いた顔をした。

「えつと、どう言うことすか？」

どうやら赤龍帝は気づかないらしい。

そんな彼に分かるようにアザゼルが補足をする。

「見ての通りだ。今日からこいつもこの学園に入学したんだよ」

「へ?……ええええええ!!」

「ついでに言えば、このオカルト研究部の新しい部員でもあるな」

「因みに私学年は二年でクラスは赤龍帝と同じクラスらしいぞ?」

続けざまに言われたアザゼルの言葉にリアス達も驚いた顔をした。

そう、私がアザゼルに頼んだのはこの事だ。

一回でいいから学生と言うものを体験して見たかったんだ。

あいにく前世でのことはよく覚えていないから私がどう言う学生時代を送ったかわからない。

故に私は学校というものにとっても興味があった。

この件は曹操にも確認しており、彼からは許可をもらっている。

せっかく協力関係を結んだんだから自由に楽しんでくるといいとお達しだ。

「まあ、そう言うわけだ、よろしくな赤龍帝、いやここは一誠と呼ぶべきかな?」

私はそう言って笑顔を浮かべた。

その笑顔を見た一誠は顔が赤くなる。

そんな一誠を見たりアスは彼の耳を引っ張った。

「いてててて!! 部長、痛いです!」

「ふん! 一誠の見境なし」

ふふ、微笑ましい光景ですね。

私はそんな二人を見て笑顔を浮かべた。

「さて、大方説明も終わったことだし、改めて自己紹介でもしうか」

「それは良いな」

アザゼルの言葉に私は返事を返す。

グレモリー達がどんな力を持っているか知ってはいるが彼らの名前まではしつかり

把握してなかったな。

そしてオカルト研究部による自己紹介が始まった。

「んじや、まず俺からだな。俺はアザゼル、墮天使達のまとめ役をやっている。趣味は神

器の解析、及び実験だ。今日からこの学校の講師で、この部活の顧問になる。まあ、よ

ろしくしてくれや」

「ああ、改めてよろしく頼む。アザゼル」

アザゼルの説明が終わった。

概ね私の知ってる通り、しかし神器について一体何を実験するのか聞きたいところだ

な、もしかして人体実験なんてしてないよな？

「次は私ね、私の名前はリアス・グレモリー。このオカルト研究部の部長をやっているのは、これからよろしくねアルテラさん」

「当分お世話になる。グレモリー部長」

「堅っ苦しいのはいは、リアス部長で良いわよ」

「そうか、それは失礼した、改めてよろしくリアス部長」

私はリアス部長と握手をする。

ふむ、実際に話してみると結構良い人みたいだ。

私が聞いた情報では無能姫と言われていたからどんな人かと思えば、成る程、情愛の深いグレモリーらしい人だ。

眷属達のことをよく思っている。

サーゼクスが溺愛するのも頷けるな。

「次は私ですね。私は姫島 朱乃。副部長をしております。駒は『女王』、名前を呼ぶときは朱乃と呼んでくれたら嬉しいですよ」

「(こ)ち(ら)こそ、よろしく頼む。朱乃先輩」

同じく朱乃先輩と握手をする。

確か彼女は墮天使バラキエルの娘だったか。

しかし今は悪魔と、詳しくは知らないが複雑な理由がありそうだな。

確か報告では雷の使い手で超がつくほどのDSだったか、怒ったら怖そうな人だ、怒らせないように気をつけよう。

「次は僕だね。僕は木場 祐斗。駒は『騎士』だよ。君も剣を使っていたね。出来れば今度手合わせ願いたいね。よろしく」

「私のあれは剣というよりも鞭みたいな物だぞ。手合わせの件なら別に構わない。しかし今の君では私には勝てないぞ？」

「ああ、分かっているよ。けど挑戦したいんだ」

「成る程、なら構わない。改めてよろしく、祐斗」

彼が聖魔剣使いか、調べでは確か聖剣計画の生き残りだったか。

しかし彼の神器は神がない世界を象徴するかのような神器だな。

聖と魔の融合か、なかなか面白い人材だ。

「次は私か、私はゼノヴィア・クアルタ。駒は『騎士』、元は教会の聖剣使いだ。今更だがコカビエルの時は助けてくれてありがとう。同じ部活の仲間としてよろしく頼む」

「こちらこそ。コカビエルの件については気にするな。私の気まぐれだ」

「そうか、しかし、助けられたことには変わりない。だから本当にありがとう」

「ふむ、なら素直に受け取るとしよう。よろしく、ゼノヴィア」

彼女がデユランダル使いか。

英雄が生まれなくなつてから純粹な聖劍使いを見るのはうちのアーサーとジャンヌ以来か、あの時も思つたがいい魂だ、悪魔となつても輝きが曇ることがない。

本当に将来が楽しみな少女だ。

「次は私ですね。搭城 小猫。駒は『戦車』です。好きな物は甘味全般です。これからよろしくお願いします」

「ふむ、因み私も甘味好きなんだか……これを見てどう思う？」

私は異次元倉庫から一つのどら焼きを取り出す。

それを見た子猫は目を見開いて驚く。

「ま、まさか、そのどら焼きは……」

「ああ、大手和菓子チェーン店、『鈴菜庵』、その本店だけで販売される限定どら焼き。1日に30個という少ない数であるがそのあまりの美味しさと、その手に入りにくさから甘味マニアの間では『伝説のどら焼き』と呼ばれている。私もこのどら焼きが食べたくて今日の朝、本店に行つて一番で買つてきた物だ……お近づきの印にどうか？」

「……ふ、貴方とは仲良くなれそうな気がします。アルテラ先輩」

「なに、（こちら）そよろしく頼むよ、小猫」

うむ、やはり聞いてた通り同士であったか、私が人間の次に好きなのが料理だ。その中でも甘味と呼ばれるお菓子全般が大好きだ。

しかしこの子が黒歌の妹か、確かに何処か彼女の面影があるな。

すぐにでも姉に会わせてやりたいが、今はまだダメだ。

サーゼクスに頼んでいるから直に大丈夫になると思うが、もう少しの待ってくれよ子猫。

しかしこの子は姉よりも仙術の適性があるようだ、鍛えれば化けるなこの子は。

「次は私ですか？ えっと、私はアーシア・アルジエントと申します。駒は『僧侶』です。よろしく願います」

「よろしく頼む。アーシアと呼んでもいいか？」

「はい！ 喜んで！」

「そうか、仲良くしよう、アーシア」

この子は確かうちの奴らがマークしていた子か。

確か神器は『聖母の微笑み』と呼ばれる回復系の神器。

どんなものも癒すことができるその力のせいで聖女と呼ばれ、そして悪魔を癒したため魔女と呼ばれ、迫害された少女。

こうして会うのは初めてだか、成る程、とてもいい子だ。

そしてその魂はとても輝いている。

現代の聖人とも言える存在と言うわけか。

「ぼ、僕ですか！ ええ、えつと、ギヤスパー・ヴラデイと言います！ こ、駒は『僧侶』です！よ、よろしくお願いします！」

「こちらこそ。まあ、そんなに堅くならなくてもいい。気軽にアルテラと呼んでくれ」「ぜ、ぜぜぜ、善処しますうー！」

ふむ、対人恐怖症と聞いていたが、予想以上だな。

見た所私だけに怯えているみたいだし、極度の人見知りと考えればいいか。

しかしヴラデイか、伯爵の子孫と言うわけか、しかしこの子に眠っている力は……いや、私が何か言うべきではないな。

これは彼の問題だ、私が関与するべきでは無いだろう。

「最後は俺だな、俺は兵藤 一誠。駒は『兵士』で一応赤龍帝です」

「ああ、知っているよ。君のことはうちのヴァーリが気にしていたからな」

「そうなのか？ 俺にはそうは思えなかったんだけど」

「……ふふ、その様子だとヴァーリに何か言われたようだな。まあ彼奴は見ての通りの戦闘狂だ、だから余り気にしなくてもいいぞ。ゆつくり君のペースで強くなればいい

や」

「そう言うもんですか？」

「ああ、そう言うものだ、これからよろしくな一誠」

今代の赤龍帝、確かに私が知っている赤龍帝の中でも今の彼は断トツで弱いな。

しかし面白い。彼の魂はとても面白い。

ここまでピンクな色をした魂と言うのも珍しい、一体どれほどの変態だと言うのだろうか。

握手していてなんだが、この子さりげなく私で妄想しているな？

分かり易すぎでよく嫌われないものだ。

いや、流星は赤龍帝と言うべきか、全く大物になりそうな悪魔だよ、君は。

「そう言えば、一誠、すまないが【赤龍帝の籠手】を出してくれないか？」

「?……別にいいですけど」

私をお願いを聞くように一誠が【赤龍帝の籠手】だす。

そして私は籠手の翠の宝玉に触れる。

『久しいな、赤龍帝、いや、ここは親しみを込めてドライブと呼べばいいか?』

『はん! やはりお前だったか。いくら子孫にしてもにすぎていると思つた。それ以前

にお前が死ぬものか。そうだろう?』

『はは、そうだな』

ドライブとは私がアツティラとして生きた時代からの知り合いだ。

まだ私が神の鞭と言われる人であった頃、全盛期とも言えるドラゴンであった赤龍帝と白龍皇の二天龍と、何度も、しのぎを削った。

人間とは言え私の力の一端を持ったアツティラは当時の二天龍ともほぼ互角にわたり合っていた。

そしてアツティラとしての私が死んでからは、アバターとしての私が何度も地上に降りていた。

彼らが神器に封印されてからはなんの因果か毎回と言えるほど二天龍の戦いに巻き込まれるものだ。

『それで、俺に何の用だ？ よもや挨拶だけでは無いだろう？』

『いや何、折角お前たち二天龍と再び巡り会えたんだ、なら今代の二天龍を私が鍛えるのも悪く無いと思つてな』

『ははは！ それは良い、正直一誠は色を好みすぎている、別に悪いことでは無いが、俺としてはもつと強くなつてもらわねばならんからな』

『そうか、まあ今回はそれだけだ、ではな』

私はそうドライブに言う意識を現実に戻た。

「……ありがとう一誠。もう良いぞ」

「え？ もう良いんすか？ まだ2秒もたつてないですけど」

まあそうだろうな。精神だけの会話であつた故、現実ではそこまで時間は経っていないだろう。

でもまあ、旧知にも挨拶が済んだしこれで良い。

「さて、全員自己紹介が終わつた事だし、最後にアルテラ。おめえも自己紹介しろ」
アザゼルが私に話すように促す。

「そうだな、では、私の名前はアルテラ。かつて破壊の大王と言われたファン族の王。アツティラの魂を受け継ぎし人間だ。好きなものは人間と甘味、嫌いなものは、話が長い人、汚いものだ。今日からこの部の一員となる。まあ、よろしく頼む」

私の言葉に全員が肯定の声で返事を返してくれた。

その後、色々質問などをされて、出来る範囲だけ答えて、そのほかはうまく濁した。
ああ、やはり、友とは良い文明だな。

第9話 温泉とほいい文明だ

「突然だけど、冥界に帰るわ」

学園の一学期も終わり、これから夏休みという今日この頃、私ことアルテラは兵藤家の朝ごはんにお邪魔させてもらっていた。

朝早くリアス部長から呼び出しがあつて特に用事がなかつた私はそのまま一誠の家にやつてきていた。

初めて一誠の家を見たときはどこのホテルだ？ と思つたが、どうやらサーゼクスが彼の家を改築したらしい。

まあ、他人の事情に私がとやかく言う気はないので気にしない事にした。

そして一誠は朝からにやんにやんにやんしていたようだ、英雄色を好むと言うが、流石に大変だなあと、私は思った。

私はすでに起きていた小猫と一緒に朝食をとつた後、少し甘味談義に花を咲かせながらリアス部長達を待った。

そして私と同じく呼び出された木場とギヤスパーを含め、オカ研メンバー全員が集まつた事で、先ほどのリアス部長の言葉に戻る。

一誠はリアスの言葉を聞いてこの世の終わりのような顔をしている。そんな彼を見てリアス部長が慌てて補足する。

「心配しないでイツセー。純粹に里帰りするだけよ。毎年の恒例なのよ」

リアス部長のその言葉に安心する一誠。

「何だ、ビックリしたあ……あれ、でも、部長の里帰りと俺達に何か関係があるんですか？」

「関係あるに決まっているじゃない。眷属であるあなた達も一緒に行くのよ。冥界にね。一応、八月の二十日過ぎまでは向こうで過ごす予定よ。修行やその他諸々の行事は冥界で行うからそのつもりでいてね」

リアス部長のその言葉に私はふと疑問が浮かんだ。

「それは、私も行っていいのだろうか？」

私はオカ研のメンバーであるものの悪魔でもなければ、眷属でもない私が里帰りについて行っているのか疑問に思った。

「ええ、大丈夫よ。お兄様には既に伝えてあるわ」

ふむ、サーゼクスが。

随分手際がいいな、もともと私を連れて行く算段でもあったのだろうか？

まあ、私も概ね暇だし別にいいか。

「ならお言葉に甘えよう」

英雄派の中で基本的に私は自由に行動することができる。

それは曹操が英雄派を作る時に協力する条件でもあった。

まあ、一応連絡はするよ、報連相は大事だからね。

「あー、でも、俺、夏休みやりたいことがあったんですけどねえ」

「ん？ 一誠は何処か行く予定でもあったのか？」

一誠の発言に私が問うた。

「はい。海やプールに行こうかなーって」

「海は冥界にはないけれど、大きな湖ならあるわ。プールだって、この家や私の実家にも

あるのよ？ 温泉もあるし、それではダメなの？」

リアス部長の言葉に少し考える一誠、そしてその顔はどんどんニヤけていく。

うん、正直気持ち悪い。

Fateの黒ひげ並みに気持ち悪い。

背景からデユフフフという文字が浮かび上がってそう。

画面越しだと特に何も思わなかったが、今ならアンとメアリーの気持ちもなんとなく

理解できる。

「……いやらしい妄想禁止」

「イツセーくん、想像以上にスケベな顔だったよ」

「先輩の想像力が豊かで楽しそうです……うらやましいなあ……」

他のお三方も同じくいい気持ちは感じてなかったらしい。

あと、ギヤスパークくん、流石にあれには懂れたらダメだからな。

「俺も冥界に行くぜ」

「ッ!？」

いつの間にか、席の一角にアザゼルが座っていた。

私以外の全員が突然の登場に面食らっているらしい。

「ど、どこから、入ってきたの?」

「アザゼルなら、普通に入り口から入ってきたぞ」

「おお、アルテラの言う通りだぜ」

私はみんなが話している間にアザゼルが来たのに気づいたが、あえて無視した。

「……心配すら感じませんでした」

「それはいかんな、アザゼルは普通に来たただけだ、もしこれが敵ならここにいるもの達は全員死んでいたな」

「ま、そうだろうな、それよりも冥界に帰るんだろ? 俺も行くぜ。俺はお前らの先生だからな」

アザゼルはそう言うのと懐からメモ帳を取り出すと、開きながら読み上げた。

「冥界でのスケジュールは……リアスの里帰りと、現当主に眷属悪魔の紹介。あと、例の若手悪魔たちの会合。あとはあっちでお前らの修行だ」

「私はどうしたらいい?」

「あん? 別に好きにしたらいいんじゃないか? 冥界に入ったら基本的に自由だ、暇

ならグレモリー達の修行にでも付き合ってやれ」

そうだな……まあ、暇だしいいか。

温泉もあるらしいし楽しませてもらおう。

「それじゃ、アザゼル……先生もあちらまで同行する事でもいいのね? なら、行きの予約

もこっちでしておいていいのかしら?」

「おう、よろしく頼む。悪魔のルートで冥界入りするのは初めてだからな。ちよつと楽

しみだぜ」

相変わらず子供みたいな奴だな。

と言うわけでオカルト研究部全員は冥界に行くことが決定したのだった。

旅立ちの日、私たちが向かったのはこの町の駅だった。

服装は駒王学園の制服姿。

冥界ではこの服装が正装らしい、ちよつと意味がわからないな。

そしてリアス部長の後ろをついて行くとエレベーターの目の前で止まった。

「ここから降りるわ。まずはイツセー。それにアーシアとゼノヴィアとアルテラからね。私と一緒に乗ってちょうだい」

「お、降りる？ 部長、このエレベーターって昇るだけじゃ……」

「ふふ、乗ればわかるわ。朱乃、あなた達はアザゼルと一緒に降りて来てね」

とりあえず、指定されたメンバーでエレベーターに乗り込んだ。

しかし見た見た所地下に降りるボタンなんて無いが……さて、どう降りるのだろうか。

「これを使うのよ」

私達が見守る前でリアス部長が懐から一枚のカードを取り出すと、それを電子パネルに向けた。

瞬間、電子音が鳴り響いたと思ったら、エレベーターが静かに下降し始めるのを感じた。

「マ、マジで降りてる!? 部長、これって一体……!?」

「この駅にはね、地下に秘密の階層があるの」

「は、初耳ですよそんなの!?!」

「当然よ。これは悪魔専用のルートだもの。人間では一生辿りつけないわ。意外かもしれないけど、この街にはこんな風に悪魔の領域が結構な数隠れているのよ」

そうこうしている間に、エレベーターが停止し、扉が開いた。

リアス部長に促されて出てみれば目に飛び込んで来たのは、冗談みたいに広大な空間だった。

よく見れば所々駅のような面影がある。

メタい発想だが、地下にこれだけの空間を作つてバレないとか、日本の政府馬鹿すぎだろ。

いや、この町が悪魔の領地だから出来るだけか。

少し待っていると、エレベーターから祐斗や子猫、アザゼルなどが降りて来て合流した。

全員合流した事でリアス部長を先頭に歩き出す。

そしてリアス部長にくっついて来たところには列車らしきものが鎮座していた。

見た目からして独特なフォルムだが鋭角で、悪魔を表す紋様がたくさん刻まれている

た。

「グレモリー家所有の列車よ」

リアス部長がそう言つて列車を紹介する。

へえ、貴族悪魔は列車すら所有してるんだ。

飛行機と違つて需要少なそうだなあ。

そして部長先導のもと、私たちは列車の中へと足を踏み入れた。

既に席も細かく決まっているそうで、リアス部長は先頭車両。

グレモリー眷属とアザゼルや私は中央から後ろの車両。

対面席で、私と小猫が並んで座り、祐斗とギヤスパーが私の前に座った。

直後、勢いよく汽笛が鳴らされ、列車がゆっくりと動き始めた。これで後は到着まで

待つだけだろう。

「出発か、だいたいどれくらいで着くんだ？　小猫」

「何もなければ大体一時間ぐらいつきます」

一時間か、地味に長いな、普通ならここで本でも読んで暇をつぶすんだが。

私がそう考えていると何かを察した祐斗が私に話を振る。

「暇なら質問してもいいかい？　僕たちはまだアルテラさんのことをよく知らないから

ね」

「そうですね。私も気になります」

祐斗のその言葉に小猫が肯定をした。

ギヤスパーも緊張しながら肯定していた。

隣の席の一誠たちやいつの間にか来ていたリアス部長も交えて私に対する質問会になった。

「それで、まず何が聞きたい？」

私がそう言うのと皆考えるように頭をひねる。

そしてゼノヴィアが挙手をする。

私はそのまま喋るように促す。

「私は英雄派のことについて教えて欲しい。名前は知っているイマイチ理解していない。だから出来れば教えて欲しい」

ふむ、英雄派のみんなのことか、正直直接会ってくれた方が早いと思うが……まあ、べつにいいか。

「いいだろう。確かに協力すると言うのに相手のことを知らないと言うのはいささか不安だな。取り敢えず英雄派について詳しく教えよう」

私はそう言うのと腕を組んで語り出す。

「英雄派とは基本的に人間の神器使いが集まってできた組織だ。所属するものほとんど

どが人間社会を迫害されたもの、神器の所為で人外に狙われたものが多い。それ故に英雄派でははぐれ者を保護することがよくあった。その中には人間だけではなく妖怪などの人外も含まれる。『禍の団』に入ったのもより多くの神器使いの情報を知る為だ……ここまでいいか？」

私が皆に確認すると全員首を縦に振る。

「よろしい。さて、英雄派の構成員は三つに分けられる。まず非戦闘員。基本的に戦う力を持っていないもの達がここに含まれる。二つ目は戦闘員。基本的に戦う力を持ったもの達。神器使いの人間や迫害された人外達が多い。そして最後に私たち幹部、これについては詳しくは説明できない。ただ一つ言えることは、全員が神器や何かしら力を持つており、一人で最上級悪魔を倒せる実力者達であると言うことだ。さて、英雄派についての大体の説明はこれで終わりだ。他にはあるか？」

幹部達が最上級悪魔を一人で倒せるといったところでリアス部長らは驚いていた。

まあ、力や能力的に劣る人間が悪魔の中でも最大と言える最上級悪魔を倒せると聞いたら驚くのも無理ないか。

けどリアス部長、あなた達は勘違いしている。

化け物を倒すのもまた人間であると。

私がそう聞くと次に手を挙げたのはリアス部長だった。

「幹部は全部で何人いるの？」

「私を合わせて全部で七人、リーダーを抜いて六人、皆知っている中ではヴァーリも幹部の一人だ。そして幹部クラスの實力者が数人いる。幹部のほとんどは英雄の子孫やその魂を継ぎしもの達だ。さて、質問は以上か？」

私がそう言うのと皆黙る。

「ふむ、ならこれで終わりだな」

私がそう言うのと皆が別々に話し始めた。

私も小猫と共に甘味の話をして時間を潰すのだった。

あれから数時間たち、リアス部長の実家に着いた。

沢山のメイドや執事に迎えられて中に入ると現グレモリー家当主との会合があった。

一言で言えばサーゼクスという息子にこの親あり言わせる親だった。

悪魔にしては人柄がよく私が人間でも下に見るような事はなかった。

その後リアス部長含む眷属たちは若手悪魔たちの会合のために会場に向かった。

リアス部長は私も来るように話を振ってくれたが流石に私はそれを拒否した。流石に若手悪魔の会合に行くのは気がひける。

下に見られるのは別にいい、相手を見た目や種族で決めつける奴は基本的に弱い。ぶつちやけ面倒臭いため断った。

そして今私はグレモリー家の人に案内して貰ったこの家の書庫。

中を見たときは図書館とも見紛う大きさに流石の私も驚いた。

まあ、英雄派にはこれ以上の大きさの大図書館があるのですぐに慣れたが。

私はここで自分が持ち込んだ本を読んでいる。

部屋で読むよりも本に囲まれた部屋で読むのが私のマイブームだ。

本から香る古いインクの匂いが丁度いい雰囲気醸し出している。

そして結局部長たちが帰ってくるまで私は本を読んでいた。

そして帰ってきた部長の第一声が。

「アルテラ、手伝いなさい！」

いきなりどうした。

私はそう思った。

その後リアス部長の説明を聞いて何となく理解はできた。

どうやらシトリー眷属とのレーティングゲームの為に修行をするらしく、その修行を

私にも手伝ってくれとのことだった。

アザゼルも合流し修行について大体の話が終わった。

「話は以上だ。明日は朝食後に庭に集合しろ。そこで改めて修行の内容について説明する。気合い入れろよ」

私を抜いた各々に気合いの籠った返事をする皆。

そこへ、狙いすましたかのようにサーゼクスの『女王』グレイフィアが姿を現した。

「お話がまとまった所で、温泉のご用意が出来ましたのでよろしければご利用ください」
「お、いいねえ！ やっぱり冥界といえは温泉に限る。冥界で屈指の名家であるグレモリーの私有温泉とくれば、名泉も名泉だろう。今から楽しみだぜ」

そう言えば皆が会合に行っている間ずっと本を読んでいたわけだから私の体も少し埃っぽくなっているかもな。

そう思っていた私にはその温泉という言葉がとてもいいものに感じた。

ウキウキ顔のアザゼルに触発されたのか、みんなもそれぞれに温泉についてしゃべりだした。

「そうね。会合で疲れちゃったし、早速入ろうかしら」

肩に手をやりながらそう言うリアス部長。

「うふふ、この温泉に入るのも久しぶりですわね」

いつもの微笑みを浮かべる朱乃先輩。
そして私はというと。

「何をしている？ 置いて行くぞ」

「え？ て、早！」

すでに皆を置いてグレイファイアについて遠くにいた。
そして皆は私に急かされるように温泉に向かった。

くリアス side

温泉に入って早々朱乃によるセクハラから逃げ出し、私は息を整える。

最早スキンシップを超え、完全に愛撫と呼べるものだった。

全く朱乃のスキンシップは心臓に悪い。

私はそう思いながら周りを見渡した。

みんなが私の眷属の子達がそれぞれ体を洗う中私の目がいったのは端っこの方で身

体を洗っているアルテラだった。

私は彼女の横に近づく。

「となり、いいかしら?」

「ん? リアス部長か? 別に構わんよ」

彼女がそう言ったのを聞くと私は彼女の横に座り頭と身体を洗う。

そして横を見て私は彼女に気になっていたことを聞く。

「ねえ、その体の線は一体何なの?」

彼女の裸体に不自然に書かれている薄い白線。

私が指摘すると彼女は困ったような顔をした。

「あらら、普段は見えないようにしているのだが……どうやら温泉に浮かれて消すのを忘れていたようだ」

彼女はそう言いながら自分の体の線を撫でる。

その姿は同じ女性の私でも艶めかしく映るほど蠱惑的だった。

「さて、この白線のことだったか。実は生まれた時からあるものでな、私自身もよく知らない」

「そうなの?」

アルテラの言葉に私は少し驚く。

「まあ、多分アツティイラの由来の紋様なのだろう」

「アツティイラ由来の？」

私はよくわからなかったので不思議そうに頭を傾けた。

そんな私を見たアルテラは考えるそぶりをした後話す。

「そうだな……リアス部長は私の祖先、アツティイラについてどこまで知っている？」

「少しだけ、『神の鞭』や『神の懲罰』と呼ばれ恐れられていたことくらい」

他にはフン族の王で神の武器を持った人間であったことかしら。

「ふむ、大体そうだな。それを踏まえた上でアツティイラについて話そう。そうだな……ではまずアツティイラの出生について話そう」

「……そんなもの何であなたが知っているの？」

アルテラはアツティイラの子孫であって本人では無い。

そんな事を知っていることに疑問を持った私はそう聞いた。

しかし件のアルテラはその問いに普通に答えた。

「むむ？ そう言えば言つてなかったな。私はアツティイラの子孫と銘打っているが、本当はアルテラの前世、もとい魂を継ぎし人間だ」

へえ、知らなかったわ。

アルテラはそのまま話を続ける。

「さて、話を戻そう。アツティラの出生についてだが。まずアルテラはフン族の王であつたが元はフン族王家の人間ではない。赤の他人だ」

「え？ そうなの!？」

まさかフン族の大王アツティラがフン族とは関係ない赤の他人だったなんて。

「ああ、アツティラであつた彼女は記憶を失つていてな、あても無く大地をさまよつていた。そんな彼女を見つけたのがフン族の王だつた。そして彼女の持つ力を見た王は彼女を養子として迎えた。それが今に語られるアツティラの出生の真実だ」

「そうだったの」

私は彼女の話す真実に驚いた。

けど何でアツティラは記憶を失つたのかしら？

「さて、次は何故アツティラが破壊の大王と呼ばれていたかだな。アツティラは敵国を侵略する時、決まって全てを蹂躪した。大地、町、その全てをな。そして彼女の持つ軍神の剣、その破壊の力からアツティラは『神の鞭』や『神の懲罰』と呼ばれることになつた、そして話は変わるが、彼女は君臨すれど統治せずの王であつた、故に彼女の死後、繁栄した大国は彼女の子供達の当主争いによつて滅んだ。その波乱の人生のはて、後世の人間達がつけた敬称が破壊の大王。それが、アツティラが破壊の大王と呼ばれる理由だ」

話し終えたアルテラは、静かに目を閉じていた、まるで昔を思い出すように。

そんな彼女の雰囲気を感じた私は話をそらす。

「そ、そう言えば貴方の持つているあの剣、あれが軍神の剣なの？」

私の話を聞いたアルテラは静かに肯定する。

「ああ、あれは確かに軍神の剣だ。いや、軍神の剣だったものだ」

「?……と言うと？」

「ああ、あれは私が、んん……アツティラが軍神との戦いの果てに手に入れた軍神の剣。その因子をアツティラが吸収した事で一体化した物。まあ、例えるなら神器みたいなものだ」

アルテラは手に軍神の剣を出してみせる。

相変わらず剣とは思えない機械的な見た目をしている。

「この剣は、私の魂と一体化している。故にこれは軍神の剣であるものの厳密には軍神の剣であったものと言うわけだ」

アルテラはそう言うと言わぬ口を消す。

「なるほど、つまりそれは軍神の剣でもあるけど、同時に貴方自身でもあると言うことね。貴方の力に少し納得したわ」

神器使いでは無いとアザゼルから聞いていたけど、まさか神の武器と一体化している

なんて。

彼女のあの異常な力は神の力というわけね。

「アルテラさ〜くん♪」

アルテラの後ろから朱乃が抱きつく。

そのことに驚くアルテラ。

「あ、朱乃先輩！ ん、んん、あつ、ひあつ！」

「あらあら、直に触つてみると……癖になりそうな肌触りですね♪」

嫌がるアルテラに朱乃が絡みつく。

私もさつき味わつたからわかるけど、朱乃は上手いのよね、何がとは言わないけど。

けど朱乃もそうだけどアルテラも綺麗なのよね。

整った体の凹凸が綺麗でまさに女性の理想の体型。

大和撫子系の朱乃とは違って褐色肌のインド系の美人。

対照的な二人が絡んでいるのをみると同じ女性でも思うところがあるわね。

「あ……あんっ！……いい加減にしろ！」

朱乃に絡まれていたアルテラが朱乃を振りほどき怒鳴る。

流石にやりすぎたと思つたのか朱乃も清く謝る。

「御免なさいね？ 癖になる肌触りだったものだから」

「……はあ……はあ……今度からは、やめて下さい」

アルテラはそう言うとそのまま湯船に歩いていった。

〈side エンド〉

「はあ、酷い目にあった」

全く、朱乃先輩のセクハラは堪えるな。

私は湯船に肩まで浸かりながらそう思う。

しかしリアス部長が私について聞いてくるなんてな。

自分の事を誰かに話すのはいつぶりだろうか、最後に話したのは曹操だったか。

きつとレーティングゲームを控えて不安なんだろう。

なんせ今回の相手はリアス部長の幼馴染であるソーナ会長のシトリー眷属達、緊張するの無理はないか。

「はあ……いい湯だな」

アザゼルの言う通り、ここはいい湯だな。

体に溜まった疲れが流れ出るようだ。

「うーん、極楽極楽♪……ん？　なんだ」

私が温泉を楽しんでいると上の方から声が聞こえたそして上を見てみれば。

私の目の前に一誠がいた。

「……ほえ？」

「おわああああああああつ！」

ドッポオオオオオオオンツ！

私は飛んできた一誠にぶつかり湯に沈む。

そしてすぐに湯船にでて息を吸い込む。

「ブハッ！　一体なんだ！」

私が湯船から出て周りを見てみると目の前の湯が赤くなっていた。

そしてそこをよく見てみると……

「……………ツ！」

鼻血を垂れ流しながら私を見る一誠がいた。

なぜ空が降ってきたのか、何故私を見ているのか、いろいろ言いたいことはあるがと

りあえず一言。

「一誠よ、最後に言い残すことはあるか？」

「は、はい！ えつと……柔らかかったです」

「そうか、なら死ね！」

私は一誠に向かって割とガチな威力で蹴る。

湯船に入っていた私の足は水の抵抗を切り裂き、そのまま特大の水柱を上げながら一誠を蹴り飛ばす。

そして私の蹴りを受けた一誠はそのまま男女の風呂を分ける垣根を突き破り男湯に吹っ飛んでいった。

一誠を吹っ飛ばした後、私は周りを見る。

私の蹴りで少なくなった湯、一誠が飛んでいき突き破られた垣根の穴。

「……はあ、まったく、せつかくの湯が台無しだ」

私は空を見ながらそう悪態を吐くのだった。

第10話 白猫は願いを抱く

私が一誠を蹴り飛ばした後。

一誠を女湯に投げたアザゼルを締めた私は温泉から上がった。

そして豪華な夕食をとった後、就寝した。

そして次の日、朝食を済ませた私たちはグレモリー家の庭の一角、いよいよ里帰りの大元の目的である修行が始まろうとしていた。

アザゼルが一人一人にトレーニングメニューを発表していく、そんな中、私には唯一気にかかることがあった。

アザゼルの説明を聞くにつれ、ドンドン表情が険しくなる小猫。

「だいじょうぶ、小猫ちゃんならソツコーで強くなれるさ」

「……そんな、軽く言わないで下さいっ！」

一誠の慰めの言葉に苛立ち怒鳴る小猫。

そんな彼女を見た私はアザゼルに申し出た。

「アザゼル。済まないが少しいいか？」

「あん？　なんだアルテラ、話なら手短にな」

「なに、そう長くならんき。小猫の修行の件だが、私に一任してくれないか？」
私がそう言うのと周りのものは驚いた顔をしていた。

そんなみんなの反応を知ってか知らずか、アザゼルは返答した。

「それはあれか？ 俺の訓練メニユーにケチつけるってことか？」

そんなアザゼルの言葉を私は否定する。

「いや、内容はそのまま、私がすることは小猫の訓練の教官。小猫の様子を見て少しメニユーを変えるかもしれないが、概ねアザゼルのメニユーで訓練をやらすさ」

私のその返答に納得したのかアザゼルは一誠達に向き直り続きを話し始めた。

アザゼルの説明の間、私だけはずっと小猫の方を見ていた。

アザゼルが下した小猫の修行は主に基礎の向上。

周りのもの達と比べればその訓練は地味と言えるだろう。

「小猫。私から一つ忠告しておく」

「……………なんですかアルテラ先輩」

私の言葉に小猫は返事を返す。

しかしその目は先ほどの説明の時と変わらず暗かった。

「お前にとつて、力とは、思いとは、いったいなんの為のものか……それだけだ、ではな」

私はそう言うときびす（踵）を返して小猫のいる森から離れていった。

〈小猫side〉

冥界にある森の中、私は森の木を殴っていた。

アザゼル先生から課せられたメニューをこなし、その後は自己の向上のために鍛錬、
これらの繰り返し。

何度も何度も、いつの間にかそうして修行を始めてから5日がたっていた。

けど私はそんなことを気にせずに自らの体を酷使する。

『お前は申し分のないほど、オフエンス、ディフェンス、『戦車』としての素養を持っている。身体能力も問題ない。だが、リアスの眷属には『戦車』のお前よりもオフエンスが上の奴が多い』

私の頭にアザゼル先生の言葉がよぎる。

わかっていきます。

私の拳が木の幹を抉る。

『リアスの眷属でトップのオフエンスは現在木場とゼノヴィアだ。禁手の聖魔剣、聖剣デュランダル、凶悪な兵器を有してやがるからな。ここに予定のイツセーの禁手が加わると……』

わかつています……

私の蹴りが幹にめり込む。

『お前が自ら封じているものをさらけ出せ。自分を受け入れなければ大きな成長なんてできやしねえのさ』

わかつてます！

私は我武者羅に木々を殴り散らす。

そして周り木々が倒れた後、私は。

「……わかつているんです」

そう一人呟く。

私が弱いことなんて知っている。

私がグレモリー眷属の中で最弱なのもわかっている。

皆と違ってこれと言って特別な力を持たない。

この身に宿る力を解放すればアザゼル先生の言う通り、強くなるかもしれません。

私が抱いているこの想いも晴れるかもしれませんが。

「それでも、私は！」

私は一步を踏み出す。

しかし私の体は急に力を失い私は地面に倒れた。

癒えない疲労、5日も不眠不休で修行をしていた為、私の体は限界を迎えていた。

むしろこれまで持った事に驚きを感じる。

悪魔になつて文字通り人外の力と防御、体力を得た私でも、何日も不眠不休での無理

な修行は心身共に疲弊を余儀なくされた。

「……まだ……私、は……っ！」

しかし私は倒れた体を無理やりおこそうとする。

しかし燃料を入れずに無理やり動かした体は私の意思とは別に一向に動こうとしない。

そして動くのをやめた事で突然私を睡魔が襲った。

睡魔に抗う私はアルテラさんの言葉を思い出していった。

『お前にとつて力とは、想いとは、いったいなんの為のものか』

正直彼女がなにを思つて私にこの言葉を言ったかわからない。

きつとアルテラさんの事です。

私のこの気持ちを理解した上で私に送った言葉だと思えます。私にとって力とは、姉に向ける想いとは……一体、何でしょうか。そしてついに私は睡魔に負けて瞼が落ちていく。眠ってる暇なんてないのに。

しかし体は正直で、私の意識は夢の世界へと旅立っていった。薄れゆく意識の中、私は声が聞こえた気がした。

「……本当に、世話がやける後輩だ」

そして私の体を温かい気持ちで包み込んだ。



私は今、倒れた小猫を膝を枕にして寝せながら本を読んでいた。

最初は遠慮していた小猫だが正直な腹の虫が鳴った事で脱力して魚を手にとった。

「……………ッ！」

焼き魚を口にした小猫はよつぽど腹が減っていたのか焼き魚をガツガツ食べる。

まあ無理もない。

5日も飲まず食わずだったのだから腹が減るのは当たり前か。

そしてすぐに小猫の焼き魚は無くなり、物足りなさそうな顔をしていた。

「お代わりはいるか？」

「……………いただきます」

小猫の言葉を聞いた私は他の焼き魚たちも小猫にあげる。

そして数分後、今ある焼き魚を食い尽くした小猫は満足そうに笑顔を浮かべていた。

しかしすぐに元の無表情に戻った彼女は立ち上がると私に背中を見せた。

「どこにいくつもりだ？」

「……………」

私の言葉に無言になる小猫、恐らくまたあの無理な修行を再開するのだろう。

しかしそれではダメだ。

このままではきつと小猫は壊れてしまう。

「小猫、この際だから話をしよう。そこに座れ」

「……わかりました」

私の言葉に渋々ながら従う小猫。

さて、ここからは私の出番か、私は覚悟を決めながら小猫に話す。

「面倒ごとは嫌いだ。故に単刀直入に聞く。何故そんなに焦る小猫。お前も今のままじゃ強くなれない事はわかっているだろうに」

「ツー」

私の言葉に苦虫を噛み潰したような顔になる小猫。

「私も少なからずお前の事情は理解している。しかしそれでも強くなりたいたのであれば己が身の力を受け入れなければならぬ。しかしお前はそれを拒む。小猫、お前は一体どうしたいんだ？」

「先輩に、私の何がわかるんですかー」

私の言葉に小猫は怒鳴り声をあげた。

しかしそんな彼女の言葉を無視して私は話す。

「そんなもの知らん。私はお前ではない、お前が何を思っただけを考えているなんて完全に理解なんてできんさ。そんな私ができる事はお前の話を聞くくらいだ」

私に誰かを慰めるなんて器用な真似はできない。

私はどこまでいっても結局、破壊しか出来ない。

そんな私が誰か説教なんて、ヘドが出る。

しかし今の私にできる事は、小猫、お前の心の声を聞くことだけだ。

「……なりたい」

そして小猫はポツポツと涙を流しながら話し出した。

「強くなりたいです。祐斗先輩やゼノヴィア先輩、朱乃さん……そして一誠先輩のように心と体を強くしていきたいんです。ギャーくんも強くなってきました。アーシア先輩のように回復の力もありません……このままでは私は役立たずになってしまいます……『戦車』なのに、私が一番……弱いから……お役に立てないのはイヤなんです……」

やはりか、私は小猫の言葉でやつと確信した。

私があザゼルの話の時に小猫の目を見て感じたもの、それはかつて私が見た男と同じ、自分の無力を嘆き、自分の才能の無さに嘆き、力を得るために修羅の道を歩いた男と同じ目であったのだ。

私はきつと、小猫に彼奴と同じ道を進んで欲しくなかったのだろう。

だからわざわざあザゼルに小猫の教官役をかって出たんだ。

全てを吐き出した小猫に、私はゆっくりと近づき頭に手を置く。

そのことに狼狽するも嫌がる素振りを見せない小猫を見て、私は彼女の頭を撫でなが

ら話す。

「ああ、よく話した小猫。残念ながら私は誰かを慰める言葉を持ち合わせていない。だから、はつきりいつてやろう。小猫よ、お前は自分が弱いといったな？　しかしそれはお前の勘違いだ」

「……え？」

私の言葉を聞いて惚ける小猫。

「やはりか。まあ、自分と他人では見えるものが違うからな。仕方がないといえば仕方がない」

「どういう、事ですか？」

「そうだな、なら説明しよう。まず小猫、転生前のお前の種族は猫又でその中で希少な猫？　という妖怪であるな。そしてお前が猫？の力の仙術を使わないのはお前の姉のことがあるから、そうだな？」

私の問いに首を縦に振ることで肯定する小猫。

その顔にはなぜ知っているのですか？　という気持ちも見取れたがあえて無視した。

「その上で話そう。まずお前が自分を弱いと思っている事についてだが、はつきり言つて気の所為だ」

「え……そんな筈は……」

「そんな筈も何も、まずお前は前提条件を無視している。小猫、お前の駒はなんだ？」

「勿論、『戦車』です」

「そう、『戦車』だ。戦車の駒の特性は純粋な筋力や防御力の向上。アザゼルも言っていたが今のグレモリー眷属の中で小猫が一番バランスが良い」

私の言葉を聞いて首をかしげる小猫。

「まだわからんか。お前の戦闘での立ち位置はなんだ？」

「それは……『戦車』の力を生かした前衛です。けど私よりも祐斗先輩やゼノヴィア先輩の方が接近戦なら上では？」

「そうだな、確かに聖魔剣とデュランダルという破格の兵器を持っている祐斗達は客観的に見て強いだろう。しかしそれでも小猫、純粋な力言えばお前はグレモリー眷属の中でも一番だ、それこそ『女王』の朱乃先輩よりも」

「……え？」

小猫は私の言葉に驚いた。

まあそうだろうな、眷属の皆ですら気づかない事だ、アザゼルはきつと理解していたが敢えて無視したのである。

私が気付けたのも小猫に似た事例を見たことがあったからだ。

アザゼルはきつと手っ取り早く強くなる方法として小猫に仙術を受け入れろと言ったのだろう。

しかし人間は過去のトラウマをそう簡単に乗り越えることはできない。

それは妖怪も、悪魔も同じく言えることだ。

確かに仙術を使えるようになれば小猫の戦力としての有用性は格段に上がるだろう。

しかしそれは違うと思う。

何故なら今の小猫に必要なのはもつと別のものには思えたからだ。

「さて、その上で提案なんだが、小猫、お前はまだ、自分の過去と決別できないでいる。しかし今のお前は何を優先してでも強くなりたい。誰にも置いて行かれないために、仲間役に立つために。そうだな？」

私がそう聞くと小猫は力強く頷く。

未だ戸惑いはあるようだがその心は修行を始めた時よりも頑固とした意思を宿しているようだ。

「小猫、なら問おう。お前は強くなりたいか？」

「はい！」

「お前にとって力とは何だ？」

「私にとって、力は……みんなを守る力です！　そして、私が自分の道を切り開くための

!

「私の課す修行は辛いぞ？ それこそ今までお前が感じた事のない程な。それでもやるのか？」

私はそう小猫に聞いた。

脅しとかではなく、これから私が小猫に進める修行はマジな方で命懸けだ。

そんな私の脅しに小猫は……

「はい、アルテラさん！」

はつきりとそう答えた、揺るぎない意思を感じる彼女の瞳を見た私は思わず笑みをこぼす。

「そうか、なら時間も少ないのですぐ始めよう。何、そう難しい事じゃない。小猫、残りの数日、お前にはある武術をおさめてもらう」

「武術、ですか？」

私の問いに首を傾げながら答える小猫。

「ああ、そうだ、そしてこの武術を収めた暁には、お前は自分の過去と決別できる、私がそう断言しよう。さて、本来ならゆつくりと教えるつもりだったがあいにく日が残り少ない。だから……」

私はそう言うのと腰を低くして、手のひらを小猫に突き出すように構える。

「……いきなりなにをッ！」

私から漏れ出す殺気に反応した小猫はすぐに臨戦態勢を取る。

そして私はそんな彼女の疑問に答えるようにこう言った。

「なに、よく言うだろ？ 体で覚える方が早いと。だからな小猫……」

アルテラの姿は一瞬消え、そして次に現れたのは小猫の目の前、いきなりのもので反応できない小猫はかろうじて腕をクロスさせ防御姿勢に移る。

そしてアルテラは小猫に聞こえる程の小さな声でこう言った。

「死ぬ気で、覚えろよ？」

その言葉と同時に防御を無視してアルテラの放つ一撃が小猫を吹き飛ばした。

第11話 出オチつて、よくあるよね？

小猫との修行から数日。

ついに修行期間が終了し、久々に皆が集合した。

やはり修行の影響か皆二週間前に比べると見違えるほど強くなっていた。

一誠もどうかこうにか禁手に至ったらしくとても晴れやかな表情をしていた。

参考までにどうやって禁手に至ったか聞いたところ、一誠は「俺、大人になったんですよ」と一言だけ言っていた。

正直わけがわからない。

その話をしていた時にリアス部長は顔を赤くして、アザゼルは大笑いしていたのできつと何かあったのだろう。

まあ何であれ一誠には禁手おめでとうと一言言っておいた。

そして皆が次の日のパーティーに備えるためにその日はすぐに就寝した。

そして次の日の夕刻、私は悪魔達のパーティーに来ていた。

正直、なぜ私が悪魔達のパーティーに出席しているか不思議に思う。

リアス部長達に無理やり連れてこられ、流されるままにメイド達にドレスを着させら

れた。

そしてそのまま悪魔のドラゴン、タンニーンに乗って会場に向かい、そして現在に至る。

ほんと、何でこんなことになっているんだ？

私は沢山の悪魔達が楽しそうに談笑をしているのを見ながらテラスで惚けていた。

正直、悪魔達のパーティーに今は人間である私にどうしろと？

「暇そうですね。アルテラ先輩」

「ん？ ああ、誰かと思えば小猫か」

私は自分の近くに来た小猫を見てそう返す。

「折角のパーティーなのに、アルテラ先輩は混ざらないですか？」

「……はあ、知ってて言ってるだろ？」

「はい、もちろんです♪」

私は、こちらに向かつて可愛らしい笑顔を浮かべる小猫を見てため息を吐いた。

ほんと、何でこんな風になっちゃったんだろう。

修行で小猫に限界を超えさせ尚も肉体を極限まで苛め抜く、小猫がやっていた我武者羅な方法ではなく、理論と経験をもとにした改造、もとい修行は良くも悪くも小猫を変えた。

未だ私以外にはこんな風は無邪気な姿は見せないが、彼女の心の闇となっていた膿はとり除けたと思う。

しかし本当に人間なことがあるか分からないな、小猫は元は猫又で、今は悪魔だけど。正直鍛えた私が言うのも何だが小猫は相当な実力を得たと思う。

それと同時に何故か私は小猫にとって大切な家族として認識されたいらしい。

昨日の夜もいつの間にか私の布団の中に乗り込んで来たから注意したら。「ごめんね♪」と楽しそうに笑顔を浮かべなおかつその見た目を最大限利用した攻撃を私にはなつて来た。

なるほど、これが一誠の言っていた『萌え』と言うものか、とあの時は鼻血をこらえながら思い出したものだ。

「いきなり無言になってどうしたんですか？」

「……いや、何でもない」

「変なアルテラ先輩ですな♪」

小猫の変わりように思考が明後日の方に向かっていたとは口が裂けても言えない。

はあ、何故こんなことに、オーフィスといい、小猫といい、私はロリっ子に好かれる星のもとにでも生まれたのだろうか。

まあこの話はいい。

私は話題を変えるために小猫に話しかけようとした。

「そう言えば小猫「白音」……」

しかし、私の言葉を遮るように小猫が喋る。

「えっと、小猫「白音です」……」

無言の笑顔で私を見つめてくる小猫。

これは呼ばなければいけないのか？ 白音は小猫と名前がつく前の名前。

私基準で言えば真名みたいなものか、しかしそれを呼べと言うことは……

「いいのか、私で？」

「……先輩だからですよ」

小猫、いや白音はそう恥ずかしそうにそう言った。

ああもう、可愛いいなこの野郎。

少し言葉が乱れた、しかし白音が可愛いのは事実なので否定はしない。

「では……白音、これでいいか？」

「はい、有難うございますアルテラ先輩……アルテラ姉様」

と、白音は顔を赤くしながら私をそう呼んだ。

やばい、まじ可愛い、これは黒歌が自慢するのわかる。

こんな小さい子に姉様なんて呼ばれたら愛が鼻から流れ出そうだ。

いかんいかん！ 私はロリコンではない。

ましてや、あんなシスコンと同類でもない！

何とか持ち直した私は明鏡止水の心で平穩を取り戻し話の続きを喋る。

「ところで白音、体の調子はどうか？」

「はい、概ね問題ないです。むしろ今まで以上に体を自由に動かせるようになりました。少し前の私ならいきなりの変化に戸惑っていたかもしれませんが、アルテラ姉様のつけてくれた修行のおかげでどうにか力をコントロールできています」

「そうか、やはり彼奴の力は白音と相性が良かったらしいな。正直私もここまで白音が成長するとは思わなかった。全く、ヒトとは本当に面白い」

私は白音を見ながらそう呟く。

修行の時間が足りなくて正直どうしようかと思っていたが土壇場で白音が急成長してくれたおかげで何とか形になった。

私は白音とテラスから森を眺めながらそう呟く。

「なあ、白音」

「なんですか、アルテラ姉様」

「再三聞くようで悪いが、答えてくれ。白音にとって力とは、一体なんだ？」

私は修行の間も何度も聞いた質問を白音に投げかける。

正直、この言葉に意味はない。

何故なら力なんてものは本人がどう思っていようと圧倒的脅威であることに変わりない。

しかし私は聞かねばならない。

彼女を鍛えた者として、彼女に力を与えた者として。

私の投げかけた問いに白音は考える間も無くこう言った。

「何度聞かれても私の返答は変わりません。例えばどんな強大な力を得ようと、どんな暴力的な力を得ようと、私が力に求めることは一つです」

白音は私の方に振り向きこう言った。

「その力は私の敵を倒すにたる力であるか。それだけです」

白音は笑顔でそう私に向かって宣言した。

そしてそんな白音の返答を受けた私は。

「くくく、そうか。本当に私にはもったいないほどお前はいい弟子だよ、白音」

アルテラは心底嬉しそうにそう笑った。

いやはや、本当に似ているな。

見た目も違う、性格も違う、性別も違い、種族も違う、だと言うのに白音の姿からは昔の彼奴が重なって見える。

いつも寧猛な瞳で私を見るあの人間に。

私は嬉しくて笑っていると私の魔力探知に何かがかかると感じた。

そしてその魔力の質と大まかな数を認識した私は深くため息を吐いた。

「はー、こんな時に奴らか」

「アルテラ姉様、これは……」

白音も感じたのだろう。

そして私は白音と一緒にコッソリ会場から出て外に向かった。

白音は未だ心配そうな顔になっている、私は彼女の頭に手を置いて撫でる

「心配するな。確かに数は多いが、まだ対処できないほどじゃない」

私はそう白音に言い聞かせると電話を取り出して彼奴にかける。

電話のプルプルという音が数秒なり、そして件の相手につながった。

「もしもしアルテラだ、今暇か？ アザゼル」

『いきなりなんだよアルテラ。こちとらサーゼクス含んだ魔王たちと楽しく酒飲んでいたのに、そもそもお前は……』

酒の入った親父よろしく鬱陶しく長話をしようとするアザゼル。

しかし私はそれを無視して急かすようにアザゼルに聞かせる。

「単刀直入に言う。この会場に向けて不明な魔力を感知した。十中八九『魔神の団』だろ

うな。数はおよそ数百、未だ増え続けていることから魔物、または召喚獣であると思われる」

『おい、それマジか？』

あまりの衝撃に酔いが覚めたのかいつもの調子に戻るアザゼル。

「マジだ」

『おいおい、勘弁してくれよ。こんな時まで襲撃かよ、本当に面倒くせえなあ』

「同感だ……さて、そこで提案なんだが、今回の件、私に任せてはくれないか？」

『……何？』

私の言葉に訝しむ声を上げるアザゼル。

「何、折角のパーティーだ、そちらも水を差されたくないだろう。それに相手は隠密に長けているようで、未だ他のもの達には感知されていない。故にこのまま私が出向いてかたをつける。いい提案だろ？」

『……け、いいぜ、その話で構わない。しかしお前でもバレずにその数を相手にするのはキツイんじゃないか？』

確かに、いくら私が強くてもここにいるもの達誰一人にバレることなく殲滅することは無理だろう。

私個人の気配は隠密できても破壊の余波の爆音まで消せるわけでは無い。

しかしそんな事は百の承知だ、故に手は打ってある。

「安心しろアザゼル。すでに手は打ってある」

『あん？ それはどういう……』

アザゼルの言葉は最後まで続く事はなかった。

何せ電話が切れてしまったのだから。

私たちがいた会場のビルには透明な壁のようなものが覆っていた。

「アルテラ姉様、これは……」

「なに、私の仲間の一人がやったんだ。幹部に結界張りのプロフェッショナルがいてな、

これはそいつの結界だ。これなら一時間ぐらいなら魔王達にもバレないさ」

アザゼルがどう行動するか分からないがな。

まあ、何とかするだろ。

「ふむ、結界が貼られたという事はそろそろか」

「?………いったい何のことですか?」

白音が首を傾げていると私の目の前に大きな魔法陣が現れる。

そして魔法陣からは4人の人影が現れる。

「ふむ、久しいな皆」

「ああ、久しぶりだなアルテラ」

「元氣そうにやー！」

黒い和服の女性と黒い学ランを着た白髪でボサボサの長髪をしている男性がアルテラに挨拶をした。

初めて出て来た二人の片方を見て白音が目を見張る。

「んにやー！ 白音、何でー！」

黒い和服の女性、黒歌も白音を見て驚いていた。

「黒歌、姉様……」

子猫はゆつくりと黒歌に向かって歩いて行く。

そんな白音を見て黒歌も戸惑いながらも自分の妹を迎えようと手を広げる。

そして姉妹の感動の再会が……

「アルテラ姉様直伝、猫殺し！」

「え？ フギヤツ！」

しかし白音は黒歌の顔面に向かって私が戯れに教えた必殺技のパンチを黒歌に向けて放っていた。

飛んだ黒歌は地面に顔を擦られて、数十メートルの所で止まった。

「おお、綺麗に入りましたねえ」

「……死んだか」

白髪の男性の後ろにいた緑の男女は黒歌の飛びよう感想を漏らす。

「死んでにやーい！」

しかし流石は黒歌、白音の割とガチな一撃を受けてもピンピンとしている。

そしてゆつくりこちらに戻ってくる。

「白音酷いにや！ お姉ちゃんとの感動の再会のはずでしょ、なのに何で殴るのにや！」

「数十年私を置いてどこほつつき歩いてたんですか、という意味を込めての打撃ですよ

黒歌姉様」

そう言われた黒歌は押し黙る。

そして白音は私の後ろに隠れ。

「それに今の私の姉様はアルテラ姉様です。昔の姉はお呼びじゃないです」

そんな白音の言葉を聞いて黒歌がガーン！という効果音が出そうなほど落ち込んだ。

「あー、すまないが話をしてもいいか？ 割と時間がないからな」

「ああ、黒歌は気にしなくてもいい、このシスコンはすぐに復活する」

私の言葉通り数秒後復活した黒歌を入れて話が始まった。

「まず、いきなり呼び出してすまん。何分急なことであった故」

「そこは気にするな。ちやうど暇していた所だ」

白髪の男性がそう返す。

私の服の裾を掴んで引っ張る白音。

「ん? 何だ、白音?」

「今更ですけど、この人たちは誰ですか?」

白音は不思議そうに彼らを見て言った。

そう言えば白音は彼らと会うのは初めてであったな。

「時間もないが、仕方ない。すまんが黒歌以外は自己紹介をしてくれ」

「何で私を抜くにゃ!」

いや、お前の事は白音も知ってるだろ。

そして私の言葉に苦笑しながらも残りの三人は自己紹介をする。

「確かに、自己紹介は大事だな。俺はジークフリート、英雄シグルドの血を継ぎし者だ。英雄派では幹部をやっている、よろしく頼む」

白髪の男性、ジークは白音にそう紹介する。

「次は自分すか。自分はまあ、ロビン・フット、義賊ロビン・フットの魂を継ぎし者でさあ。元々は孤児でして今はロビンの名を名乗ってます。気軽にロビンでいいぜ」

オレンジの髪にフードを纏った男、ロビンはそう名乗る。

「最後は私か。私はアタランテ、アルカディアの女王、アタランテの血を継ぐものだ。因みにこの耳と尻尾は遺伝だ、別に妖怪というわけではない」

金から緑のグラデーシヨンの髪をしたケモ尻尾の女性、アタランテはそう名乗った。

「さて、自己紹介も済んだことだし早速命令をだそう。まずアタランテとロビンは左翼を、ジークと黒歌は右翼を、中央は私……と、白音がやる」

白音の瞳は私を見つめ自分も出ると言っていた。

「ちよつと待つてよアルテラ。白音にもやらすの」

案の定黒歌は白音の身を案じて反発する。

しかし私は白音の頭を撫でながら黒かに説明する。

「なに、白音は今回は見学だ。間近で実践を見て勉強した方がいいと思った故の行動だ。

異論はあるか?」

私の言葉におし黙る黒歌、しかしその顔は未だ納得していないようだ。

まあ姉である黒歌が妹の白音を心配する気持ちはわかる。

だがしかし。

「安心しろ黒歌。私が断言する、今の白音は強い。なんせ人外では2人目の『覚醒者』だからな」

私の覚醒者という言葉に驚く4人、まあ、普通は驚くよな。

英雄派でも今の所は黒歌以外に人外の覚醒者は出ていない。

実質的に白音で2人目の少ない成功例だ。

「嘘！ 白音が覚醒者！ 一体誰のよ！」

「黒歌に続いて妹もか、これは凄いな」

「へー、んじや、お仲間ってことだな」

「仲間ですか？」

ロビンの言葉に白音が疑問符を浮かべる。

その疑問に答えるように私が説明した。

「言い忘れていたが此処にいる四人は全員が覚醒者だ、英雄派の戦闘員の五分の一が覚醒者で構成されている」

「……そうなんですか」

白音は感心したようにそう呟く。

私は目の前の冥界の森に視線を向ける。

「さて、では時間だ。出来るだけ森は破壊するなよ」

「アルテラさん。奥の手使って一掃していいですか？」

「……まあ、別にいいか。だが加減はしろよ？ お前のアレはシャレにならん」

「了解！ 奴さん達は見えないが恐らくあの辺でしょ。んじや開幕の一発お見舞いしときましようかね」

ロビンはそう言うのと懐から籠手型の弓を取り出して装着、そしてその弓の弦を引つ張り天に向かって構える。

「何をする気ですか？」

「まあ、見ていればわかる。取り敢えず私の後ろに下がれ」

白音は彼の行動が理解できないため疑問符を浮かべる。

そうこうしているうちにロビンの弓に緑色の魔力が溜まっていく。

私は白音に言い聞かせるようになって呟く。

「白音、よく見ておけ。これが英雄……いや、人間の真の力だ」

そして溜まっていた魔力がついに解放される。

「いくぜー！【祈りの弓】！」

ロビンが放った矢は到底ありえないであろう距離まで飛び森の中に落ちる。

そして次の瞬間森から大きな大樹が生えた、大樹には魔物のようなもの達が飲み込まれており所々血が流れている。

そして最大値まで大きくなった木はまるで息を吐き出すように紫色の煙をまき散らした。

そしてその煙が到達する場所から次々と魔物が現れ地面に倒れていく。

後ろの皆は私が破壊の结界を出しているおかげで紫の煙は届いていない。

そして数分後、ロビンが手に持っていた弓を外すと同時に大樹はどんどん縮んでいった。

そして後に残るは森の入り口のあちこちに倒れる魔物と魔獣の姿だけであった。

「やり過ぎだろ」

煙が無くなった事で安心した私は結界を解く。

「私はほどほどにと言った筈なんだが。これは流石にやり過ぎだ」

「あー、そつすね。正直俺もビックリ。冥界だと「祈りの弓」の威力が上がるみたいですね。流石は冥界に繋がる植物だ、まあ、妥当といえば妥当かな」

「かもしれないな……さて、ロビンのお陰だ大体片付いたな、後は残党狩りか……ん？」
残党を狩るために森の中を探知してみるとなんと魔物の数が減っていなかった、むしろ少し増えているくらい。

そして魔物はどんどん森から出てくる。

どうやら隠密は辞めたらしい、まあ私たちにとっては何方でも大して変わらんかな。しかし魔物の数が増えるか。

「……どこかに召喚主、または統率者がいるな。作戦は先程と同じ、どうやら何らかの方法で魔物を増やすことが出来るらしい、見つけ次第処理しろ」

「了解した」

私がそう言うとは皆はそれぞれの場所に走っていく、私は白音を連れてそのまま森に踏み込んだ。

「姉様。質問いいですか？」

「答えられる事なら何でも聞くといい。それで何だ？」

私は横から奇襲を掛けてくる五匹の狼の魔物を軍神の剣で破壊して白音の質問を待つ。

「では質問です。先ほどの『覚醒者』とは何ですか？」

白音がそう聞いてくる、私は上から飛び降りて切り裂こうとした虎の魔物を振り返る事なく剣でスライスする。

「うーん、そうだなあ。簡単に言えば過去の英雄の力を持っているものだ。先祖返りや、輪廻転生、色々あるが、そんな稀有な力に目覚めた者たちを私達は総じて、目覚めし者、『覚醒者』と呼ぶ」

「目覚めし者……ですか」

「まあ、黒歌や白音は色々と例外であるがな」

白音が難しそうな顔をしながら考える。

しかし警戒は解いていないようで、後ろから奇襲を仕掛けようとした獣型の魔物に回し蹴りを叩き込んで粉碎した。

そしてしばらく森の中を歩いていくと少し開けた広場に出た。

そして広場の中心を見ると地面に座って何かをしている女性とその周りに魔獣や魔物が大量にいた。

女性は私達に気づいたようで立ち上がってこちらに体を向ける。

「ふ、誰が出張ってくると思えば、下級悪魔とただの人間とは、正直がっかりね」

女性はこちらを見ると見下す様にそう言った。

その言葉に白音は少しムツとしたが直ぐに元の無表情に戻る。

「がっかりしているところ悪いが、単刀直入に聞く。お前は誰だ？」

「私が誰かって？ ふふ、いいでしょう。下等な人間と未熟な悪魔に教えてあげるは。

私の名前はアルメダ・ウアレフアル、我らが王に使いし魔神が一体」

彼女の話を聞いてアルテラは納得した様に周りの魔獣を見る。

「ウアレフアル、成る程だから魔獣や魔物なのか。まあ大体分かるがこの魔物達はお前の仕業か？」

「ええ、私の可愛い下僕たち、私が忌まわしき現悪魔たちを殺す為に作り出した下僕」

「つまりお前の魔神としての能力は『魔獣創造』の劣化版ということか」

アルテラはそう言うのと剣の先をアルメダに向ける。

白音も私に続く様になって構えを取る。

しかしアルメダは未だに余裕の微笑みを見せる。

「あら、私を殺すの？ 貴方が？ 下等な人間の英雄程度が？ は、なかなか面白いじゃない。じゃあ、こうしましょう」

アルメダはそう言うのと周りの魔獣たちに指示を出す。

「私の下僕たちを全員倒せたら私と戦わせてあげる。それじゃ、やりなさい！」
女性の掛け声に従う様に周りの魔獣たちが一斉にこちらに飛びかかってくる。
悪魔ですら引き裂くその脅爪がアルテラたちに振るわれる。

このままでは数秒後には無残な姿に成り果てるだろう。

しかしアルテラは焦る様子もなく呟く。

「確かに大変そうだ……まあ、正直……」

アルテラは手に持つ軍神の剣に魔力を収束。

いつの間にか現れている魔法陣に向かって投擲した。

「私に対して数で押すとか、愚策にも程があるだろう」

そう、言葉が発された次の瞬間、天から光の柱が広場に落ちた。

アルテラがした事、特に特別なことはしていない。

簡単に言えば転移陣に向かって真名解放した軍神の剣を投擲しただけ。

そして転移陣向こうは広場の上空。

光が晴れるとそこには大きなクレーターができており何も残っていなかった。アルテラたちは予め防御魔法を展開していたため無傷。

そして煙が上がるクレーターの中心には彼女の愛剣の軍神の剣だけだった。

「殲滅終了だ」

「いや、流石に酷すぎませんか？」

別にいいだろう、勝手に慢心して勝手に死んだし。

てか魔神柱になる事なく死んだな彼奴、敵なら第二形態ぐらいなつてから死ねよ。

塵おいてけ！

なんか変な電波を受信した気が……まあいいか。

私は敵のあまりのあっけなさにため息を漏らす。

「はあ、白音帰るぞ」

「え？ いいんですか？」

別にいいだろう、魔力の感じからジークやロビンの方も終わった様だし。

てか何気に悪魔が三人来てたのね。

私はついさつき消えた魔力の反応を見てそう思った。

そして特に支障なく私と白音は戻り、ご飯を食べたりパーティーの続きを楽しんだりした。

パーティーから帰って来たとき、会場や料理を用意したサーゼクスが涙目だったのはまた別のお話。

中々美味しかったと言っておこう。

さすがは貴族、いいもん食べてるよ。

第12話 北欧の主神襲来

「アザゼル side」

「失態だな」

魔王領にある会議ルームでうちのシエムハザが、開口一番にそう言った。

俺こと、アザゼルはと言うと、となりで「程々にな」と心中で思いながら、茶を飲んでいた。

魔王主催のパーティーの日、悪魔たちは『魔神の団』の襲来を受けた。

見ての通り、墮天使側のシエムハザと天使側のセラフさんたちはお怒り中だ。

まあ、俺も人のことを言えないんだけどな。

総督の俺がハメを外してカジノやパーティーに夢中だったなんて口が裂けても言えない。

状況次第じゃ即協定違反とされて、大変なことになってたかも知れねえ。

さらにシエムハザは追加で報告、と言う名のお小言が始まる。

あーあ、こいつの小言が始まると長えんだ。参ったね。

事件的には收拾がついている。

アルテラと英雄派のやつらのお陰でこちらの被害はゼロだ。

俺が目を向けた遠くでは、チビドラゴン化しているタンニーンと上役たちがもう直ぐ開かれるリアスとソーナ・シトリーの戦いを予想している。

「俺はリアス讓を応援させてもらおうか。何せ、俺が直々に鍛え込んだ赤龍帝がいるのでな。面白い小僧だぞ彼奴は」

タンニーンは豪快にそう笑っていた。

そんなタンニーンを尻目に俺は苦笑しながら自分の隣に目を向ける。

そこにはラフな服を着たアルテラがポップコーン片手に座っていた。

こいつ、完全に観戦ムードじゃねえか

「お前観戦する気満々だな。てかそのポップコーン何処から持ってきたんだよ」

「むぐむぐ……ポップコーンなら自前だが、何だ、欲しいのか？ やらんぞ？」

「いや、いらねえから」

口一杯にポップコーンを頬張っているアルテラに俺は呆れる。

まあ、アルテラ以外の奴らも概ねこんな感じだ。

ハハハツ、協定結んでから緊張感ねえなあ、大丈夫かね、三大勢力。

そんな時、部屋の扉が開かれ……そこに現れた人物に、皆が度肝を抜かす。

「ふん。若造どもは老体の出迎えもできんのか」

入ってきたのは、古ぼけた帽子を被った隻眼の爺さん。

白い髭を生やしており、床につきそうなくらい長い。

服装も豪華絢爛というよりは質素なローブだ。

杖をしているが、腰も痛めているわけでもないだろうさ。

「……オーデイン」

そう、正体は北欧の神々の主神オーデイン！

鎧を着た戦乙女を引き連れてのご来場だった。

「おーおー、久しぶりじゃねえか、北の田舎クソジジイ」

俺が悪態をつくくと、オーデインは髭をさすった。

「久しいの、悪ガキ墮天使。長年敵対していた者と随分と仲睦まじいようじゃが……また小賢しいことでも考えておるのか？」

「ハッ！ しきたりやら何やらで古臭い縛りを重んじる田舎神族と違って、俺ら若輩者は思考が柔軟でね。煩わしい敵対意識よりも協力した方がいいと判断したまでだ」

「弱者どもらしい負け犬の精神じゃや。所詮は親となる神と魔王を失った小童の集まりよのう」

このクソジジイ……口数だけは相変わらず減らねえ。

「子の親離れ……とは考えてくれねえのかねえ？」

「無理じゃな」

即答かよ。本当、この空気をどうする？

俺とジジイとの間に、険悪な雰囲気漂う。

いつまでも続くかに見えたその空気は、一人の言葉によって霧散した。

「……………オーディンか」

俺の横から聞こえた言葉、それは小さい声ながら、やけに鮮明に聞き取れた。

それはジジイも同じなのか、声が聞こえた事に驚きの表情を浮かべた後、その目を俺の隣に向ける。

それにつられる様に、俺も自分の隣に目を向ける。

そしてそこには先ほどと同じくアルテラが何の変哲もなく座っていた。

「久しぶりだな、オーディン。取り敢えずあれだ、喧嘩なら外でやってくれ、正直とても

五月蠅い」

そんな相手の状態を気にする事なくアルテラは平然とそう言いかけた。

そしてアルテラの言葉で再び皆が度肝を抜かした。

なんせ彼女が啖呵を切った相手は北歐の神、それもその主神である。

そんな神々の長に対してアルテラは、まるで近所の親父に接する様な気軽さで、その口からハッキリと「五月蠅い」と毒を吐いたのだ。

これには皆が驚きを通り越して固まった。

アルテラの言葉で背筋が凍る寒気から絶対零度の静けさに変わった観戦ルーム。

しかしその静寂を破ったのは、意外な人物だった。

「……………ククツ、くはははは!!」

静寂に響く笑い声、その声の発生源は何と件の主神、オーデインその人であった。

お付きのヴァルキリーの女性ですら目を丸くするオーデインの奇行に、さらに皆が混乱の坩堝に落ちた。

「ひいひい……ああ、久々じゃわい、こんなに笑ったのは。いやそれも仕方がない、何せ儂を誰か知ってなおかつ毒を吐く気兼ねがある奴がいると思えば、まさかお主だとは。何百年ぶりじゃろうか……のう、アルテラ?」

「そうだなあ。最後にあつたのは……確かとある神の封印だったから、結構昔じゃないか?」

「おお、そう言えばそうじゃったな。いやしかし本当に久しいのう」

アルテラに対してまるで旧知の友の様に接するオーデインに、俺を含めた周りには、やはり目を見開いて驚きを表している。

「おいちよつと待て、アルテラ。色々と待て」

流石にこの状況はどうかと思つた俺は、喋るアルテラの肩に手を置いて話を遮る。

そんな俺の気持ちを知ってか知らずか、アルテラは頭に疑問符を浮かべながら俺の方に顔を向けた。

「ん、どうしたアザゼル？　今私はオーデインとしゃべっているんだが」

「そうじゃぞ悪ガキ。他人の話に割り込んではいかんと神から教わらなかつたかの？」

「五月蠅えよジジイ。いやあんたは後でいい。取り敢えずアルテラ。お前オーデインのジジイと面識があつたのかよ！」

ジジイが五月蠅く何か言っているが俺はそれを無視して、皆が思っているであろう疑問をアルテラにぶつけた。

「いや、面識も何も私とオーデインはしんゆ………んん、知り合いだぞ？」

少しももつた様だが、アルテラの言葉を聞いて俺は少なからず納得した。

ついさつきまで、何故アルテラが北欧の主神と知り合いなのかと色々と思考をめぐらしていたが考えてみれば不思議なことではない。

先ほどの話を聞くに何かしらの出来事で協力した中なのだろう。

しかし改めて思ったが、こいつの交友関係の広さには脱帽する。

まさか北欧の主神とまで知人の中とは、この調子だと他の神話体系の神々とも接点があるのかも、あるいは……

俺が色々と考えて頭を悩ませていると、アナウンスが流れた。

『間も無く、レーティングゲームが開始いたします。観客の皆様、席に座りお待ちください』

「そろそろゲームが始まるみたいだね」

アザゼルが考えている間、いつの間にかオーデインと会話をしていたサーゼクスがそう言う。

その言葉を聞いて周りの者達は自分の席に戻っていく。

「オーデイン様、こちらの席にどうぞ」

「おお、気がきくのロスヴァイセ。では、拝見させてもらうぞサーゼクス、セラフオール。お主の妹達のゲームを」

オーデインは二人に向かってそう言うと言簡易的に用意された椅子に座った。

それに続くように、残りの者達も皆椅子に座りゲームの開始を待つ。

しばし待った後、VIPルームの巨大な壁に映像が映し出され、アナウンスが流れ出す。

『皆さま、このたびグレモリー家、シトリー家のレーティングゲームの審判役を請け負うことになりました。ルシファアー眷属『女王』のグレイフィアでございます』

『我が主、サーゼクス・ルシファアーの名のもと、ご両家の戦いを見守らせていただきます。どうぞ、よろしくお願い致します。さっそくですが、今回のバトルフィールドについて

の説明です。このステージはリアスさまとソーナさまの通われる学舎、駒王学園の近隣に存在するデパートをゲームフィールドとして異空間にご用意致しました」

画面がフィールドの全体の映像から、それぞれの陣営の映像に切り替わる。

『両陣営、転移された先が「本陣」でございます。リアスさまの本陣が二階の東側、ソーナさまの「本陣」は一階西側でございます。「兵士」の方は「プロモーション」をする際、相手の「本陣」まで赴いてください』

両陣地の開始地点はデパートの端同士で、デパートの大きさから見てそれなりの距離がある。

「ふむ、これは部長たちが少し不利のようだな」

「だな、今回のルールは『デパートを破壊し尽くさないこと』だからリアスたちグレモリー眷属は能力的に不利になる。メンバーの半数が『パワー中心』だからな、お得意の破壊力のある攻撃を封じられたことになるな」

三十分が経ち、自陣に集合している両陣営。

全員がそれぞれの陣地に集合した事を確認すると、審判役のグレイフィアはアナウンスを流した。

『……開始のお時間となりました。なお、このゲームの制限時間は三時間の短期決戦形式を採用しております』

「ブリッツか、これは中々見応えがある試合が見れそうだ」
俺は笑いながらそう言った。

そしてついに……

『それでは、ゲームスタートです』
戦いの火蓋が切って落とされた。